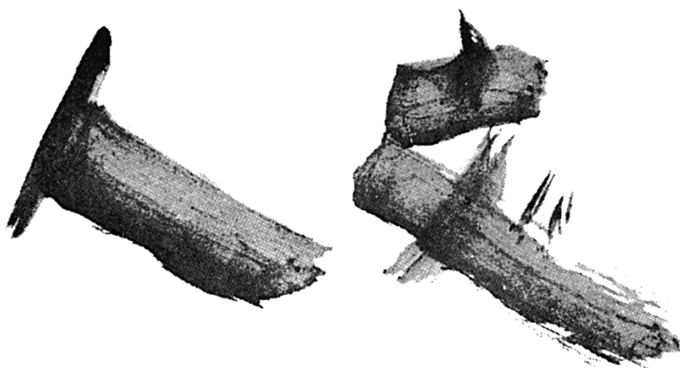




第六八号



2021

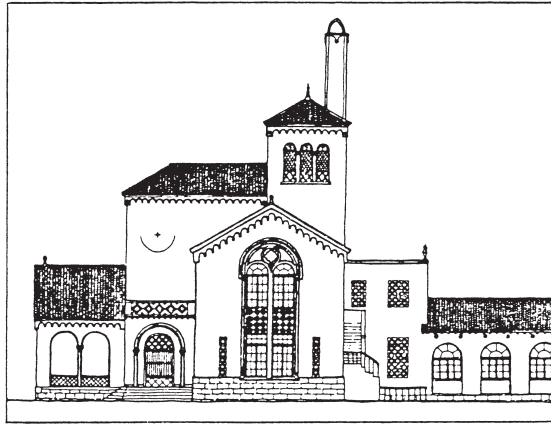
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第六八号

2020年4月—2021年3月

も く じ



随想

「維正之供」再考

岩井 茂樹

トシヨニの思い出

浅原 達郎

講演

講演会ポスターギャラリー二〇二〇

彙報

共同研究の話題

『チベットの歴史と社会』と武内紹人先生のこと

巨星墜つ

池田 巧

徐夢莘『三朝北盟会編』と文献会説

小関 隆

三世紀東アジアの文物をさぐる

古松 崇志

序跋を読む——漢籍を見る会

向井 佑介

「秦代出土文字史料の研究」班の二〇二〇年

矢木 毅

所のうち・そと

宮宅 潔

トッテトラレテ

都留俊太郎

バンデミック下における「家庭」^{ホーム}雑考

直野 章子

お帰りなさい、外人さん！

フォルテ・エリカ

神が降りる

藤原 辰史

「所のそと」に出るにあたって

池田さなえ

書いたもの一覧

.....

「維正之供」再考

岩井茂樹

昨年、一冊の大作をいただいた。『維正^{いせい}之供——清代田賦与国家財政』（北京師範大学出版社 二〇二〇年）、著者は華東師範大学の周健さん、わたくしとは浅からぬ縁がある。

二〇〇六年の秋、かつての留学先だった南開大学に招かれた。岸本美緒さんと二人で連日計四回の講演をおこなうことになっており、岸本さんもわたくしもいささか疲敝したもの、社会史研究室で整理中の人民公社の文書をみせていただくなど、楽しく有意義な滞在であった。その時、講演を聴いて下さった方のなかに周健さんがいた。碩士課程の研究生として、清代の「差徭^{さぎょう}」について研究しているとのこと、岩井の著書を読んでいるので、話を聴きたいと仰る。その日の夜、宿舍の部屋に来ていただいて、小一時ほど話をした。問題の本質をついた周健さんの質問は、わたくしにとっても有益だった。

周健さんはその後北京大学に移って研鑽を積まれ、二〇〇九年春には京都大学に滞在された。森時彦さんが主宰する「長江流域の歴史景観」共同研究班で、周さんに報告をしていただ



ことになった。十九世紀前半の江南で漕米を徴収するさいの上のせ課徴たる「浮収」と州県の財政との関係という、かつてわたくしが手がけた問題について、資料の博搜にもとづいて緻密な議論が展開された。わたくしがコメンテーターを仰せつかったが、その研究の広さと深さに感嘆するしかなかった。

清代の財政収入の七割ほどを占めていた田賦は、その法定の徴収額が長期にわたって固定され、税率も低く抑えられていた反面、さまざまな名目の法定外の取り立てが増えていったことにより、負担の不公平などの社会問題を引き起こすことになった。十数年間におよぶこの問題についての研究を著書にまとめるにさいし、周健さんは「維正之供」という『書経』無逸にみえる古句を、その書名としたのである。

賦役や財政にかかわる発言をするにさいし、明清時代の論者はしばしばこの「維正之供」に言及した。『書経』のなかで、この語は周の文王の統治をはめたたえる文のなかに見えるが、貢納の要求が適切であり、乱脈な徴収がないという理想的な状況を示す表現として多用されることになった。それは、社会の公課負担が過度でなく、公正におこなわれるべきだという政治的な主張であり、「維正之供」を超える重い取り立てが農民を苦しめているという現実にたいする批判でもあった。明清時代の賦役制度を研究するにさいし、法定の恒常的な公課について、わたくしは「正額」という語をつかったが、この「正」とは「維正之供」を意識したのであった。



しかし、唐代に書かれた『書経』の注釈書である『尚書正義』をひもとくと、「惟正之供」（維と惟は同義）についてまったく異なった解釈がなされている。『後漢書』にこの句の引用が見えるが、そこでは「惟政之共」となっており、文王はその支配する諸国の見本となるように身を謹んで政治をおこない、正しい道をもって周王に仕えることを示したのでいうのが「正義」の説であった。唐代まで、「惟正之供」の句はこのような文脈のなかで釈義されていた。

調べてみると、「惟正之供」が、正當かつ公正な賦税を示す句として解釈されるようになったのは、宋代からであつたらしい。朱子の門人であつた蔡沈さいちんが著した『書経集伝』は、この句を「常貢正數の外に、横よりなざまな斂とらはなかつたのだ」と釈義する。元代以降、朱子学が主流となると、このような解釈にもとづいて、この句は政治的な主張をこめて用いられるとともに、「維正之供」という表記が多用されるようになった。

さかのぼると、北宋の蘇軾がこの句について、文王は「諸邦の貢賦を私事のために使わなかつたことを言うのだ」という釈義を示していた（『東坡書伝』）。蘇軾より早くこのような解釈を提起した例を見いだすことができないので、「惟正之供」の釈義が転換したのは宋代だったと考えられる。

このような釈義の転換、言説の政治化が起つたことには背景があるだろう。蘇軾が『書経』の解釈を著したのは、王安石の新法とそれを支える経書の理解に反論する意をこめていたと



いう。南宋期には、軍事費の膨脹のために「横ざまな斂あつや暴あらしい徴とら」を餘儀なくされたが、こうした現実への批判が、朱子の学派による「惟正之供」の再解釈とその定着につながったわけである。

清代の考証学者段玉裁や王引之は、朱子学派による解釈の転換をやり玉にあげる。「蔡沈が「正」「共」を恒常的な正しい数としたのは、誤ること益いよいよ甚しいぞ」(『経義述聞』)。学問的には、考証学者の説が正しそうである。しかし、こうした厳密な文献批判にもとづく考証学が隆盛した清代後期は、周健さんやわたくしが研究した「浮収」や「差徭」という、非法定的な課徴が拡大し、それにとまって負担の不公平が社会問題となつた時期でもある。それにとまない「維正之供」を求める声は日に日に高まっていったのであった。

周健さんが、とてつもない労力を注いで完成させた著書を『維正之供』と題したことは、その鋭い洞察力の一端を示す。若くすぐれた友人の大成を、心から祝福する。



トショニの思い出

浅 原 達 郎

二十年ほど前のこと、人文科学研究所北白川分館には、「トショニ」と呼ばれる私的な組織が存在した。いまとなつてはすべて夢のなかのこゝろのことである。構成員は、分館図書室の職員石田滋子さんと河野祥子さん、そして助教授のわたし浅原達郎の三人である。べつに秘密にしていたわけではないが、その存在は三人以外に知るものはなかったと思う。名の由来はもちろん当時の人気テレビドラマで、正式名称を既存の所内委員会にかこつけて「第二図書委員会」と定めてあつた。とはいえ、石田さんと河野さんは、自分たち本来の仕事をしているだけである。石田さんの担当は新規図書を受け入れ、河野さんの担当は新規雑誌の受け入れ、それをわたしが、自分の趣味と実益を兼ねて裏から手伝っているというのが、トショニの実態だった。ことのおこりは、当時つぎつぎと出版されていた中国のいわゆる新編地方志である。人文科学研究所でもできるだけ購入する方針であつたのだが、地方行政単位ごとのカードを作り、そこに購入済みの地方志の簡単な書誌を書き込んでいくという作



業を、当時わたしが夢中になっていたハイパーカードというソフト上でやってみようと思い立った。ひとりこつこつと進めていったのが、一九九八年のことである。新編地方志はその後もつぎつぎと出版されまた購入されるので、作業は継続してやっていく必要がある。重複購入防止のチェックにこの作業が有益だということもわかった。受け入れ図書の入力も図書室主導でおこなわれてはいたが、直近の未入力分がかなりたまっていて、そこはまた重複の危険の大きいところなのであった。そこで、石田さんに協力をお願いし、地方志の受け入れ情報を随時教えてもらって、わたしのハイパーカードに書き加えることにした。そのいきさつは、「中国現代方志目録起」という短い文章にまとめたことがある（二〇〇三年十二月）。

重複購入を回避しなければならないのは、地方志だけではない。一般の中国書についても、たまった未入力分が大きな問題になる。そこで、新規購入図書の選定がおこなわれるたびに、最低限の書誌情報をハイパーカードに入力し、重複のチェックに役立てることになった。石田さんとの間でデータを共有するために、わたしが自前のウェブサーバーを立ち上げ、ネットワーク経由で検索できるようにした。それが二〇〇一年の六月で、トシヨニと名乗るようになったのはそのころからだと思う。

同じころ、別の事情で、気になっていたことがある。それは中国雑誌の缺号がままみられたことで、交換や寄贈が止まってしまった場合が多い。ふだんは、受け入れられた雑誌のデータ



は、分館事務室のカードデックスというカードつづりに、河野さんが手作業で書き込んでいたのだが、これも地方志と同様に一覧できる状態にしておけば便利である。聞けば、河野さんも独力でデータ入力を試みておられたという。そこでわたしが一九九八年以後のデータについて、カードデックスからデータを写し取り、これもネットワーク経由で検索できるようにした。このいきさつも「東方部雑誌カードデックス縁起」という文章にまとめた（二〇〇四年三月）。

自前のウェブサーバーというのは、やはりはじめるべくせになるもので、とくにハイパーカードをコンモンゲートインターフェイス（CGI）にしてやると、いろいろなことができて楽しい。ネット上のBBSなども自作が可能で、二〇〇三年二月からは、ふたりの要望に答えて、専用の掲示板「トシヨニ会議室」を運用した。

フラットな人間関係が、人文科学研究所のもっとも愛すべきところだったとは、三十五年ここで過ごしてきたわたしの感慨である。掲示板の書き込みを見返してみると、トシヨニこそがそれを具現していたのだと思う。しかし、二〇〇五年の初め、河野さんの急逝によって、トシヨニは終わった。突然の知らせに茫然とするしかなかった。

まもなくして石田さんも、本館の図書室に配置換えになり、分館を離れてしまわれた。数年後、わたしも本館に引っ越して、図書のことたびたび石田さんのお世話にはなったが、もうわ



たしに手伝うことはなくなっていた。すべて附属図書館のウェブサイトで図書の所蔵が検索できるようになっていたし、たまっていた未入力分の中国書も、石村民子さんという優秀な司書のかたが、本館から分館に乗り込んで、あつという間にすべてかたづけてしまわれた。ときおり共同研究班のおやつを石田さんにおすそわけするのが、トシヨニのなごりだったのだが、そのうち新設の共通事務部に石田さんは移られ、お会いする機会さえほとんどなくなった。

月日は流れ、わたしはすっかりおじいさんになって、定年退職を目前にしている。まれに大学構内で見かける石田さんも、ちよっぴりおとなの風格がただよう。思い出のなかの河野さんだけが、トシヨニのあのころのままである。



ONLINE WORKSHOP

**Water, Waterways and Seas in Modern Japan:
Perspectives of Environmental History**
Saturday, May 30th, 9:00 AM (Japan Time)

09:00 Opening Remarks Chris Whitford (EPD) / University of Geneva

09:30 Panel 1
"Integration and Secularization of Knowledge in Late Edo/Meiji Tokyo"
Joan Shelley (Harvard University)

09:45 "Contamination of Waterways in Meiji and Taisho Japan: Early Considerations"
Chris Whitford (EPD) / University of Geneva

10:15 Panel Discussion
30-35 Coffee Break

10:45 "Vernacular Narratives and Waters: Flood Control, Rivers, and Ideological Tensions under Imperial Colonialism"
John Howard (Harvard University)

11:15 "Vanishing Islands of Modern Japan: A Short History of Island since 1945"
Paul Tabor (Oxford University)

11:45 Panel Discussion
15-60 Lunch Break

12:00 "Specializing Intimacy: The Precolonial and Postcolonial of Water in the Japanese Seafaring, 1600-1900"
Mikako Miki (Columbia University)

12:30 "Thymothematics: Authorizing Apocryphal Ecological Capital in Age Shoin, 1850-1970"
Paul Tabor (Oxford University)

1:00 Panel Discussion
14-30 Coffee Break

1:30 Concluding Remarks Paul Tabor (Oxford University)

Prior registration is required
Email us at ekc@ecoworkshop.com
Please refer to our website for detailed information.
<http://ecoworkshop.org/kyoto-2020-21>
<http://ecoworkshop.org/kyoto-2020-21>

2020 KYOTO LECTURES
Wednesday, April 22nd, 18:00h
Alistair Swale

**Gesaku Literati and Early Meiji
Print Culture
Remaking Popular
Culture for the Masses**

The Edo period (1603-1868) was a time of great cultural change. The rise of the merchant class and the decline of the aristocracy led to a new kind of popular culture. This lecture will explore the role of the literati in the development of this culture, and how they used print to reach a wider audience. We will look at the work of writers like Kyōka and Ukiyo-e, and how they used these forms to comment on society and politics. The lecture will also discuss the role of the literati in the development of the novel, and how they used this form to reach a wider audience. The lecture will be held in the evening, and will be a good opportunity to hear from a leading expert in the field.

Speaker: Alistair Swale, Professor of Japanese Literature, University of Cambridge

Location: Kyoto University, Kyoto, Japan

Registration: Free, but registration is required. Email: ekc@ecoworkshop.com

四月



講演会

ポスターギャラリー
二〇二〇

2020 KYOTO LECTURES
Friday, June 26th, 18:00h
Gala Maria Folleco

**Early Meiji
"Accounts of Prosperity"
The Making of
an Urban
Literary Canon**

This lecture will explore the role of the literati in the development of the novel, and how they used this form to reach a wider audience. The lecture will be held in the evening, and will be a good opportunity to hear from a leading expert in the field.

Speaker: Gala Maria Folleco, Professor of Japanese Literature, University of Cambridge

Location: Kyoto University, Kyoto, Japan

Registration: Free, but registration is required. Email: ekc@ecoworkshop.com

六月

2020 KYOTO LECTURES
Wednesday, April 22nd, 18:00h
Alistair Swale

**Gesaku Literati and Early Meiji
Print Culture
Remaking Popular
Culture for the Masses**

The Edo period (1603-1868) was a time of great cultural change. The rise of the merchant class and the decline of the aristocracy led to a new kind of popular culture. This lecture will explore the role of the literati in the development of this culture, and how they used print to reach a wider audience. We will look at the work of writers like Kyōka and Ukiyo-e, and how they used these forms to comment on society and politics. The lecture will also discuss the role of the literati in the development of the novel, and how they used this form to reach a wider audience. The lecture will be held in the evening, and will be a good opportunity to hear from a leading expert in the field.

Speaker: Alistair Swale, Professor of Japanese Literature, University of Cambridge

Location: Kyoto University, Kyoto, Japan

Registration: Free, but registration is required. Email: ekc@ecoworkshop.com

五月

2020 KYOTO LECTURES
Wednesday, July 29th, 18:00h
Luciana Card

**Animal
Shape-Shifters
from Japanese
Folktales to
North-American
Fiction**

This lecture will explore the role of the literati in the development of the novel, and how they used this form to reach a wider audience. The lecture will be held in the evening, and will be a good opportunity to hear from a leading expert in the field.

Speaker: Luciana Card, Professor of Japanese Literature, University of Cambridge

Location: Kyoto University, Kyoto, Japan

Registration: Free, but registration is required. Email: ekc@ecoworkshop.com

七月

2020 KYOTO LECTURES
Wednesday, May 27th, 18:00h
Paul Kreitman

**Japan's
Ocean
Borderlands
Nature and
Sovereignty**

This lecture will explore the role of the literati in the development of the novel, and how they used this form to reach a wider audience. The lecture will be held in the evening, and will be a good opportunity to hear from a leading expert in the field.

Speaker: Paul Kreitman, Professor of Japanese Literature, University of Cambridge

Location: Kyoto University, Kyoto, Japan

Registration: Free, but registration is required. Email: ekc@ecoworkshop.com



[illegible][illegible]

京大文学部人文科学研究科 人文研究アカデミー
共同研究「フーコ研究－人文科学の再発見と展開」報告会
「フーコ研究」(東宝書店)
出版記念シンポジウム



狂い咲く、フーコ

コメンテーター 喜田龍二(明治大学)
森元清彦(東京大学)

日時：2021年3月27日(土) 16:00～16:30
会場：東宝ビル 2008号室(東京都港区)
※申し込みは、京大文学部人文科学研究科にて
<https://www.cimbr.org.jp/kyo-u/>

[illegible]



京都大学・人文科学研究所

退職記念講演会

正史館

日本國

岩井茂樹教授

「歴史家の思い入れ」



岩井茂樹教授



岩井茂樹教授



『日本國』



『日本國』

退職記念講演会

会場：京都大学・人文科学研究所

会期：令和元年11月15日（金）

2021年
3月15日より

東京国立近代美術館
常設展示室
常設展示



主催：京都大学・人文科学研究所（〒606-8501 京都府京都市西京区岡崎）

共催：東京国立近代美術館（〒100-8702 東京都千代田区千代田）

後援：文部科学省（〒100-8916 東京都千代田区千代田）

E-mail: shigeaki@iui.kyoto-u.ac.jp

彙報 〇二〇二〇年四月より二〇二一年三月まで

おくりもの

- 。岩井茂樹教授は第六三回（二〇二〇年度）日経・経済図書文化賞を受賞（二〇二〇年十一月六日）
- 。藤井律之助教は第三十回（二〇二〇年度）蘆北賞を受賞（二〇二〇年十二月十七日）

訃報

- 。梅原郁名誉教授（八六歳）は、五月三日逝去。

人のうごき

- 。岡村秀典教授（東方学研究所）を人文学系長に併任（二〇二〇年四月一日～二〇二一年三月三十一日）
- 。稲葉穰教授（東方学研究所）を附属東アジア人文情報学研究中心長に併任（二〇二〇年四月一日～二〇二一年三月三十一日）
- 。石川禎浩教授（東方学研究所）を附属

現代中国研究センター長に併任（二〇二〇年四月一日～二〇二一年三月三十一日）

- 。立木康介准教授は、教授（人文学研究部）に昇任（二〇二〇年四月一日付）
- 。直野章子は、准教授（人文学研究部）に採用（二〇二〇年四月一日付）
- 。森下章司は、客員教授（文化研究創成研究部門、二〇二〇年四月一日～二〇二一年三月三十一日）
- 。NOGUEIRA RAMOS, Martin は、客員准教授（文化研究創成研究部門、二〇二〇年四月一日～二〇二一年三月三十一日）
- 。VITA, Silvio 京都外国語大学教授は、特任教授（二〇二〇年四月一日～二〇二一年三月三十一日）
- 。FORTE, Erica は、教授（東方学研究部）に採用（二〇二〇年十月十六日付）
- 。池田さなえ助教（人文学研究部）は、辞任（二〇二一年三月三十一日付）、大

手前大学総合文化学部講師に就任。

。浅原達郎教授（東方学研究部）は、定年により退職（二〇二一年三月三十一日付）

。岩井茂樹教授（東方学研究部）は、定年により退職（二〇二一年三月三十一日付）

招へい研究員

。FUESS, Harald ハイデルベルク大学教授
京都の「観光公害」
（文化連関研究客員部門）

。受入教員 藤原准教授
期間 二〇二〇年八月十一日～二〇二〇年十一月十日

招へい外国人学者

。秦 樺林 浙江大学中国古代史研究所
講師

。日藏古写本、秦漢簡牘
受入教員 永田准教授
期間 二〇一九年五月六日～二〇二〇年五月五日

。劉 雅君 上海大学社会科学学部副教

授

東アジア史の視点からみた漢唐時代の
皇太子制度

受入教員 宮宅教授

期間 二〇一九年七月三十一日～二〇二〇年七月三十日

。陳 瑤 厦門大学人文学院歴史系・助理教授

中国近代長江中流域木造帆船航運業の研究

受入教員 村上准教授

期間 二〇一九年八月二二日～二〇二〇年八月二二日

。方 艶 江蘇師範大学文学院教授
中日王権神話の比較研究

受入教員 岡村教授

期間 二〇一九年十月二二日～二〇二〇年十月二十日

。張 葦航 上海中医薬大学科技人文研究
院副教授

日本古医書研究

受入教員 平岡准教授

期間 二〇一九年十一月二八日～二〇二〇年八月二四日

。馬 茜 寧夏行政学院政治学教研部副

教授

抗日戦争時期の日本の「回教工作」に関する研究

受入教員 中西准教授

期間 二〇一九年十二月一日～二〇二〇年十一月三十日

。李 磊 華東師範大学歴史学系副教授
秦漢六朝時代の東アジアにおける政治
構造と天下概念

受入教員 宮宅准教授

期間 二〇一九年三月五日～二〇二〇年八月四日

外国人共同研究者

。陳 鳴 華南農業大学人文与法学学院
講師

秦漢『盗律』・『賊律』の研究

受入教員 宮宅教授

期間 二〇一九年八月十九日～二〇二〇年八月十八日

。HAYASHI, John ハーバード大学
PhD. Candidate

日本統治時代から戦後にかけての台湾
における治水事業や衛生事業

受入教員 藤原准教授

期間 二〇一九年九月十五日～二〇二〇年四月二二日

。趙 標錫 ハイデルベルク大学 Ph.D.
Candidate

Candidate

東アジアにおける救荒作物に関する書籍の研究

受入教員 藤原准教授

期間 二〇一九年十月七日～二〇二〇年八月二十日

。PITTELOUD, Cyrian Janek フランス国立極東学院 Research Assistant

近代日本における水質汚染と環境紛争について

受入教員 福家准教授

期間 二〇二〇年一月九日～二〇二〇年八月三十一日

。SCHAEFER, Charlotte Johanna ハイデルベルク大学 Ph.D. Candidate

日本における自閉症者を初めとする精神障害者の雇用

受入教員 藤原准教授

期間 二〇二〇年一月十四日～二〇二〇年六月三十日

。RODRIGUES, Jamila Pacheco バーミンガム大学 Visiting Lecturer

Shamanism through the body: yuta's

women's shamanic narratives on embodied pain, collective well-being and spirit communication

受入教員 石井准教授

期間 二〇二〇年三月八日～二〇二〇年五月八日

。余 柯君 復旦大学博士後

金剛智、善無畏梵漢対音譜と漢語中古音の研究

受入教員 永田准教授

期間 二〇二〇年十一月二四日～二〇二一年十一月二三日

。頼 霽澄 台湾大学文学院中国文学系博士候選人

晚明清初における僧詩選集の研究

受入教員 永田准教授

期間 二〇二〇年十一月十六日～二〇二一年十一月十五日

。MARCEAU, Lawrence Edward オークランド大学上級講師

近世日本における『イソップ寓話集』の受容

受入教員 稲葉教授

期間 二〇二〇年十二月十八日～二〇二一年十二月十七日

外国人研究者

。石垣 章子

漢訳仏典として位置付けられた疑偽経典の成立と思想の系譜

受入教員 船山教授

期間 二〇一八年四月一日～二〇二一年三月三十一日

。馬 延輝

『儀礼』学研究

受入教員 古勝准教授

期間 二〇一九年四月一日～二〇二〇年六月三十日

。陳 瑞峰

中国佛教疑偽経敦煌寫本識語の研究

受入教員 船山教授

期間 二〇一九年五月一日～二〇二〇年七月三十一日

。趙 芙蝶 人文科学とデジタル デジタル人文プロジェクトユーザー指向のデザイン

受入教員 Wintern教授

期間 二〇一九年十月一日～二〇二一年三月三十一日

。曹 天江

秦漢魏晉時代における「計校」事務の研究

受入教員 宮宅教授

期間 二〇一九年十月一日～二〇二〇年十二月二日

。Qiangting Huang

一九二〇年代、三〇年代の日本における被差別部落

受入教員 竹沢教授

期間 二〇一九年十月一日～二〇二一年四月三十日

。常 鉦熙

北宋時代における洛陽盆地の考古歴史学的研究

受入教員 岡村教授

期間 二〇一九年十月一日～二〇二〇年九月三十日

。朴 洙贊

高麗前期の王権

受入教員 矢木教授

期間 二〇二〇年四月一日～二〇二一年八月三十一日

。高 楹楹

薩摩の海と徐海—十六Cにおける硫黄

島と浙江間の硫黄貿易を中心に――

受入教員 岩井教授

期間 二〇二〇年四月一日～二〇二一年三月三十一日

。陳 佩瑜

日本統治下の台湾における「博物」の

概念：科学史上の台湾自然文学と

「博物誌」

受入教員 永田准教授

期間 二〇二〇年十月一日～二〇二一年一月三十一日

。胡 景南

陳致虚内丹思想の歴史源流についての

研究

受入教員 古勝准教授

期間 二〇二〇年十月一日～二〇二一年九月三十日

。王 含元

中国北方青銅器文化の社会変動

受入教員 岡村教授

期間 二〇二〇年十二月一日～二〇二一年十一月三十日

。肖 文遠

日中比較の視点からみた曆書時間の近代化

受入教員 村上准教授

期間 二〇二一年一月一日～二〇二一年十二月三十一日

短期交流学生

。陳 佩瑜

日本東洋史学の文脈：ドイツ歴史学から日本東洋学に至る歴史概念と「客観性」の構築

受入教員 永田准教授

期間 二〇二〇年四月八日～二〇二一年七月七日

東アジア人文情報学研究センター講習会

。二〇二〇年度漢籍担当職員講習会（初級）

第一期（十月五日）

開講挨拶・オリエンテーション

稲葉 稜

漢籍について 永田 知之

カードの取り方――漢籍整理の実践 福谷 彬

第二期（十月六日）

工具書について 高井たかね

漢籍関連サイトの利用

Wittern, Christian

実習を始めるにあたって 梶浦 晋

漢籍目録カード作成実習

第三期（十月七日）

目録検索とデータベース検索

安岡 孝一

漢籍データベース実習（一）

第四期（十月八日）

和刻本について（大学院文学研究科教授） 宇佐美 文理

漢籍データベース実習（二）

第五期（十月九日）

朝鮮本について

矢木 毅

実習解説 福谷 彬

情報交換 安岡 孝一

終了挨拶 稲葉 稜

。二〇二〇年度漢籍担当職員講習会（中級）

第一期（十一月九日）

開講挨拶・オリエンテーション

稲葉 稜

経部について 古勝 隆一

叢書部について 藤井 律之

叢書と漢籍データベース 安岡 孝一

第二日(十一月十日)

史部について

古松 崇志

漢籍データ入力実習(一)

第三日(十一月十一日)

子部について

稲本 泰生

漢籍データ入力実習(二)

第四日(十一月十二日)

集部について(大学院人間・環境学
研究科教授)

道坂 昭廣

漢籍データ入力実習(三)

第五日(十一月十三日)

漢籍と情報処理 Wittern, Christian

実習解説

福谷 彬

情報交換

安岡 孝一

終了挨拶

稲葉 穰



チベットの
歴史と社会 上
『歴史篇・宗教篇』
岩尾一史・池田 巧編



チベットの
歴史と社会 下
『社会篇・言語篇』
岩尾一史・池田 巧編



岩尾一史・池田巧（編）『チベットの歴史と社会』

〔上〕歴史篇・宗教篇（ISBN978-4-653-04561-8）

〔下〕社会篇・言語篇（ISBN978-4-653-04562-5）

臨川書店のサイト：<http://www.rinsen.com/> を参照。

『チベットの歴史と社会』と 武内紹人先生のこと

池
田

巧

この春、六年にわたる共同研究班の成果報告書として『チベットの歴史と社会』を上梓することができた。

本書は研究班に参加した歴史学、宗教学、言語学、人類学など各分野の専門家が分担で執筆し、平易な概説書と専門的な論文との間の架け橋となる参考図書を目指した。近年の国際的なチベット研究の成果を存分に反映しつつ、日本のチベット学の到達点を示すべく論述した。上巻には歴史篇・宗教篇の論考を収録し、下巻には社会篇・言語篇の論考に加え、文献案内および参考資料（チベット地域図・地名データ集、チベット文字のローマ字転写と発音表記）を掲載している。

この『チベットの歴史と社会』は、共同利用拠点事業による課題公募型研究班（所内カテゴリーのA班）に採択された「チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開についての学際的研究」（班長：岩尾一史、二〇一五～二〇一七年度）と、それを継承した班員公募型研究班（所内B班）「チベット・ヒマラヤ文明の継承と史的展開の諸相」（班長：池田巧、二〇一八～二〇二〇年度）の研究成果として刊行したものである。

二〇一五年からスタートした岩尾一史さんを班長とするA班では、中堅から若手の研究者を中心に班員を構成したが、加えて国立民族学博物館名誉教授の長野泰彦先生を顧問に迎え、重鎮として神戸市外国語大学

名誉教授の武内紹人先生と佛教大学教授の小野田俊蔵先生にも参加をお願いした。B班も最終年度となり本書の刊行後まもない本年四月三日、武内紹人先生が逝去された。武内先生は一九五一年生まれ、七月には古希を迎えるはずであった。



たけうちつぐひと
武内紹人先生

(神戸市外国語大学の退職記念パーティーにて。西田愛さんが撮影したスナップより)

武内紹人先生はチベット語学、古代チベット文献研究で世界的に著名な研究者であり、専門分野のみならず関連する周辺諸分野の研究においても、その著作や研究論文が引用される機会が非常に多い。昨年度まで日本チベット学会の会長という要職にあり、二〇二〇年十一月十四日(土)に行われた日本チベット学会の大会にはリモート参加で会長挨拶をされていた。その翌週二一日(土)にはZoomで開催した研究班にも参

加してくださった。いつもと変わらぬ快活な話しぶりであったが、それが研究班への最後の参席となった。

武内先生には『チベットの歴史と社会』言語篇の第十八章「チベット語の歴史」の執筆を御担当いただいた。

『チベットの歴史と社会』を、歴史篇・宗教篇・社会篇・言語篇の四部構成とすることは、企画段階で早々に決まり、すぐに各篇の章立てと執筆担当者の調整に入った。武内先生には、言語篇の入り口となり、しかも言語篇全体を覆うようなチベット語の歴史についての解説をお願いしたい旨の希望を申し上げた。とくに「あれほどの広大な地域にチベット語が如何にして広がっていったのか」「多様なチベット語方言が、チベット文語との間に整然とした対応関係を示すのはなぜか」そして「チベット文語はどのように成立したのか」といった根源的な問いに対して、かねてより武内先生が提唱されていた、古チベット語成立後、国家の急激な拡張に伴いチベット語が一気に拡散し、そこから諸方言も生まれたという「ビッグバン」仮説を中心に、通覧できるチベット語の歴史を書いて欲しい、とお願ひした。はじめのうちは先生は「いやあ、それはもうあちこちで書いたから」とおっしゃって、やや消極的な印象であった。「でも先生、ボクらは先生の身近にいますので、日頃からよくお聞きしていますし、論

文も拝見していますけれど、専門誌に掲載された英語論文は、なかなか一般のかたには見ていただけません。ぜひこの機会にわかりやすく日本語で書き下ろしてくださいませんか」と重ねてお願いするとともに、班員の海老原志穂さん（第二十章「チベット語方言を俯瞰的に見る」を執筆）からも口添えをお願いしてなんとかご快諾いただき、第十八章「チベット語の歴史」が書かれることとなった。やがて書き上げられた原稿の組版を進めていた頃に御病気が判明し、諸般の事情で出版に約1年の遅れが生じたため、先生には病床で校正をお願いすることとなってしまった。

また『チベットの歴史と社会』と並行して編集を進めていた科研の成果報告論集の長野泰彦・池田巧（編）『シナリチベット系諸言語の文法現象4 繫聯言語と古態』が、やはり昨年度末の三月三十日に人文に納品された。科研プロジェクトに分担者として参加されていた武内先生は、こちらの論集にもHistory of the Tibetan Languageと題する英文の論考を寄せておられた。第十八章「チベット語の歴史」に基づく英語版である。病床につかれた武内先生に代わり組版段階での図版の追加、表記の統一、校正などは編集にお任せいただき、長野泰彦先生と林範彦先生の御協力のもとでなんとか完成に漕ぎ着けることができた。

療養中の御自宅へお見舞いに行かれた班員の西田愛さんによれば、武内先生は両書の出版を心待ちにしておられたとのことであった。『チベットの歴史と社会』は、三月下旬に印刷所から入荷すると同時に臨川書店から執筆者あてに発送していただき、論集『繫聯言語と古態』のほうは、研究所に納品後、翌日すぐに武内先生のご自宅へ郵送を手配した。完成した両書をお手に取っていただけただろうかと思案していたその数日後に訃報が届いたのだった。

我々が日ごろから親しんでいるチベット仏教的な觀念で言うなら、武内先生は、未熟な後進の研究者を導く任を全うされ、その成果として御自身の論考を含むわたしたちのささやかな成就を見届けてくださったのち、次の利他行の地へと旅立って行かれたのだと思いたい。日本語と英語とで残してくださった2篇の論考「チベット語の歴史」およびHistory of the Tibetan Languageは、チベット語の歴史全般についての簡にして要を得た概説であるとともに、武内先生の理論についての恰好の解説となっている。チベット語の研究を志す者、そして研究に従事する者の必読文献として、これからも我々を導いてくださる道標となるに違いない。

巨星墜つ

小 関 隆

二〇二〇年にもまた、たくさんの巨星が墜ちた。デ
イエゴ・マラドーナ、シヨン・コネリー、野村克也、
志村けん、いずれも巨星と呼ぶに相応しい大物だが、
私は真つ先に筒美京平の名を挙げたい。滝廉太郎、山
田耕作の系譜を継ぐ日本歌曲史上の巨星である。

なんだか他の歌と違うなあ、洒落てるなあ、と子ども
なりに感じた人生で最初の曲は、おそらく「ブル
ー・ライト・ヨコハマ」(いしだあゆみ)だった。あ
らためて聴き直してみてわかったが、この筒美にとつ
て初のミリオンセラーは、Aメロ「街の灯りが」か
ら「幸せよ」まで)が九小節から成る破型なのである。
なるほど新鮮に響いて当然、それでいて作為的な不自
然さは微塵もなく、これ以外にありえないと感じさせ
るのだから、まだ二〇代の筒美が自在に駆使する練達
の技には驚嘆するしかない。

パクリの名人という評言をよく耳にするが、尋常な
らざる量産ぶり(多い時には月に四五曲!)を思えば
無理もない話といえる。アメリカのヒット曲を片っ端
から「ちよい聴き」で研究した逸話は有名だ。どんな
メロディやアレンジが聴き手にアピールするのか、
「ちよい聴き」から得たヒントを自分なりに消化し、
日本の市場でヒットする作品を次々と生み出した筒美
は、目利きとしても加工職人としても抜群の能力をも
つていた。

インスピレーションの最大の源泉は、まず間違いな
くバート・バカラックだろう。たとえば、「渚のうわ
さ」(弘田三枝子)や「また逢う日まで」(尾崎紀世
彦)のメロディに挟まれるさりげないピアノの合いの
手はバカラックの得意技だし、「涙の中を歩いてる」
(いしだあゆみ)では、Don't Go Breaking My Heart
のAメロの末尾に添えられる印象的なリフが全曲を貫
くモチーフのように使われている。もつとあからさま
に、バックキングではなくメインのメロディをBond
Streetから引用してゐるのが「恋の追跡」(欧陽菲
菲)だが、この引用のインパクトの強さはちょっと類
例を見ない。筒美とバカラックこそ二〇世紀の日本と
アメリカが生んだ最高のメロディメーカーだと信ずる
私には、こうしたパクリは文句なく腑に落ちる。

とはいえ、パクリの名人とまで評されるのは、フレーズを上手に頂戴するだけに留まらず、元ネタとなった原曲を凌駕する作品を仕立てることができたからだ。水際立った本歌取りの好例になるのが、「夜が明けて」(阪本スミ子)である(作詞は昨年墜ちたもう一つの巨星、なかにし礼)。元ネタがサイモン＆ガーファンクルが歌って有名になったフォルクローレ El Condor Pasa であることは、少しでも聴き比べれば得心がいく。しかし、できあがった曲は似て非なるどころかまったく異質、ケーナでアンデスのムードを漂わせてはいるにせよ、「夜が明けて」はあくまでも傷心ものの歌謡曲の枠内にある。にもかかわらず、原曲(これも名曲なのだろう)を悠々と超えるだけの音楽的な実質を備えていることは、音楽学者ならざる身ではうまく言語化できないのがもどかしいが、容易に実感しうるのではないかと。数十年ぶりにこの曲を聴いて、夜明けのベッドに一人残された女の感傷などわかるはずもない小学生でありながら、強く惹きつけられた記憶が蘇った。また、「夜が明けて」の高みには届いていないものの、「17歳」(南沙織)もカントリーのスタンダード Rose Garden の見事な本歌取りである。そして、余計なことを付け加えるなら、こうしたクリエイティヴな本歌取りから研究者が学ぶべきことは多いと思う

れる。

パクリだの本歌取りだのに関心が傾きがちな私にとって魅力的なのは、やはり作曲だけでなくアレنجじも手がけていた時代の簡美である。アレنجジャーとしての集大成となった「魅せられて」(ジュディ・オング)を境に、簡美は作曲に専念していく。したがって、私が見るところ、簡美の全盛期は「ブルー・ライト・ヨコハマ」(一九六九年)から「魅せられて」(一九七九年)まで、「二一世紀の人文科学」班がこたわってきた時代と重なる。「現代」が「現在」へと転換していく時代に他ならない。この決定的なターニング・ポイントを理解するうえで簡美が有効な手がかりになるかどうか、この点はなかなか難しい。これ以上ないほどの確に時代の空気を表現している一方、簡美のいくつかの曲は時代のコンテクストを超える普遍性も備えていて、一筋縄では扱いがたいからだ。

もちろん、「全盛期」などという書き方をするのは無礼千万、一九八〇年代以降の簡美も素晴らしい作品をいくつも生み出した。病を得た晩年には、学生時代の仲間とジャズ・クラブで演奏するのが楽しみだったという。簡美が世を去ったのと相前後して、齢なんと九二歳のバカラックは新作を発表した。昔と同じような、特に新味はないものの、しかし十分に瑞々しいバ

カラック節が聴かれる。簡美にも今しばらくの時間があつたなら、などと考えたかも知るが、もう充分だよ、とおそらくは首を振ったことだろう。

徐夢莘『三朝北盟会編』と文献 会読

古松 崇志

二〇一八年度に「前近代ユーラシア東方の戦争と外交」という共同研究班を開始して、ちょうど三年が経った。この研究班では、『三朝北盟会編』（以下『会編』と略称する）という南宋時代の編年体史書の会読を地道に進めている。このタイミングで共同研究について執筆する機会を与えられたので、備忘のためのメモにすぎないが、これまでの経緯を書きとめておきたい。

共同研究をはじめるに当たって、人文研東方部のひとつの伝統である「文献会読」をおこなうことに迷いはなかった。短期間のうちに研究成果を手早く要領よく量産することが求められる昨今の風潮のなかで、わ

たしたちがとりくんでいる歴史研究の分野では、文献史料にじっくりと向き合い、徹底的に深く読み込んでしっかりと土台を作っていくことこそが何よりも大事だとつねづね考えていたからである。わたし自身、それまでの数年間は諸事多忙をきわめ、目の前に来た球をとりあえず打ち返すような研究活動に終始していたため、初心に立ち返り、腰を落ち着けて文献の世界に没頭したいと切望していた。とはいえ、今どき共同研究も文献の読書会も珍しくはない。あえて人文研で共同研究班を立ち上げるからには、歴史上重要でありながら独りではとつつきにくい重厚な文献で、これまで十分に論じつくされていないものを取り上げなければならぬと考えた。

テーマとしては、個人研究で十年来看板にかかげている「ユーラシア東方史」に設定した。あまり見慣れない言葉だと思われるが、ユーラシア東方史とは、草原の遊牧民とオアシスの定住民が織りなす中央ユーラシアの歴史と、古くから農耕が発達し巨大な人口をかかえる中国本土（あるいはひとまわり広くその周辺地域を含めた東アジア）の歴史の双方をひろやかにフラットに視野に入れて考究することを目指す歴史研究の空間概念として構想したものである。ユーラシア東方史の展開を考えるうえでは、中央ユーラシア東部の狩

獵・遊牧民を主体とする北方の遊牧王朝と中国本土の農耕社会を基盤とする南方の中国王朝とのあいだの対立・共存・支配被支配・融合といった多様な関係性が決定的に重要な意味を持っている。共同研究班の題目にかかげた「戦争と外交」はその関係性を端的にあらわすものにほかならない。

会説する文献として『会編』を選んだのは、こうした問題を具体的に考察するための恰好の題材であるうえに、重要かつ重厚でありながら、まだまだ研究の余地があり、共同研究で取り組むのにふさわしいと考えたからである。

本書が扱うのは、東北アジアより勃興した新興勢力で、狩獵・牧畜民の^{ジュルチェン}女真族の建てた金国が、契丹（遼）につづいて北宋を滅ぼした時期をはさんだ一二世紀前半から半ばにかけての六〇年ほどの期間にわたる、宋（北宋・南宋）と金とのあいだの外交と戦争の記録である。撰者の徐夢莘は、中国南部の江西の人。幼いときに、郷里で金の南宋侵攻による大混乱に巻き込まれ、母に背負われてなんとか難を逃れるという経験をしてきた。成長して科挙に及第した徐夢莘は、兵乱の苦難のなかで生まれ育ったみずからの生い立ちを思い、北宋が金に滅ぼされた亡国の由来と経緯をすべて知りたいと考えた。そうして編まれたのが合計二五

〇巻にも及ぶ『会編』である。徐夢莘が本書の編纂のために長年収集した材料は、詔勅・外交文書・上奏文といった文書類から野史・伝記・碑志・筆記・文集などに至るまでおよそ二百種にも及ぶ。彼の文献収集に燃やした執念には驚かされるが、それが可能だったのは、史書の著述や刊行が盛んになった南宋の時代背景があったことを忘れてはならない。これらの文献のなかにはすでに散佚したものが数多くあるのにくわえ、他書に見えない文書・記録類も多く含んでいて、史料価値はきわめて高い。また、多様な材料にもとづくことから、文体もかなり多彩である。とりわけ宋・金两国朝廷で交渉にあたった使者が残した記録は、交渉時に口頭で交わされた発言を記した白話文で書かれ、一二世紀当時の漢語の口語史料として珍重すべきものであることは、漢語史研究の世界ではよく知られている。この書はながく鈔本の形で伝えられてきた。ようやく清末の光緒年間になってから、広東で木活字本がつづいて四川で木版本（刻本）が出版された。後者の許^{きょ}^{かんた}^く涵度刻本の影印本が一九八七年に中国で出版され、今では比較的良質の版本とされて通行している。研究班が発足した当時は、準備不足もあり、とりあえずこの通行本を底本にして研究を開始した。幸い人文研には清末民国期の文献学者で蔵書家としても名高い傅^ふ^{ぞう}増

湘^{しやう}旧蔵の貴重な鈔本が所蔵されており、つき合わせながら読んでいくことにした。読み進めていくと、鈔本は通行本と随分と異同があり、どうやらよりよい鈔本を見なければ始まらないと認識するに至った。中国には明鈔本がいくつかが所蔵されていて、そのうちの重要なものが近年複数影印出版されていることは知っていたが、日本では入手できなかった。

そこで、研究班開始から半年後の二〇一八年秋に、北京大学歴史学系での学会に招待された機会を利用して、北京の国家図書館などで文献調査をおこない、『中華再造善本』として出版された明鈔本（中国国家図書館所蔵季振宜^{きしんぎ}旧蔵本）の影印本の複写を入手して将来することができた。

その後の会説では、底本を明鈔本に切り替えた。これにくわえ、最近さまざまな収蔵機関に所蔵される数多くの漢籍善本について、ウェブ上で全文書影のデジタルアーカイブを利用できるようになってきていて、『会編』についても北京や台北に所蔵される数種の鈔本をあわせて参照することが可能になった。デジタルアーカイブの出現は、わたしたちの文献会説をおおきく変えた。参照できる鈔本の数は増え、会説のさいの校勘作業は骨の折れるものとなったが、そうやって本文を検討してみると、通行の許涵度刻本は版本の系統

としては孤立していて、かなり問題があることが見えてきた。ようするに、今後『会編』を読むさいには、通行本に依拠するわけにはいかず、明鈔本を中心に諸本をつきあわせていく必要のあることがはっきりしてきたのである。中国の研究者たちも、当然そのことに気づいており、明鈔本を底本とする『会編』の点校・整理作業が進められていると仄聞する。出版されれば、『会編』の文献研究に画期的な進展をもたらすだろう。

さて、わたしたちの文献会説では、三年かけてようやく巻一三まで読み終えた。すでに述べたように、文体が多彩であるうえに、現段階では全面的に信頼できる善本も校訂本もない。そのため、本文の釈読はなかなか難しいが、共同研究班に集ったメンバーが意見を出し合い議論しながら読み進めることで、突破口が見えてくる。それでも意見が分かれるなどして解決のつかない問題が残されることもしばしばあるが、何が分からないかが分かり、課題が浮き彫りになることもまた進歩である。このペースでは二五〇巻を全部読むなどまったく現実的でないので、当面は徽宗朝（一一一七―二五年）をあつかう「政宣上帙」二五巻を読むことを目標にして、牛歩を続けるしかないと思き直っている。

二〇二〇年度はコロナ禍にみまわれ、やむなく春か

ら全面的にオンライン開催に切り替えた。ところが、やってみると存外悪くない。このあたらしい共同研究、文献会読のかたちの可能性と課題についても述べてみたいが、もはや紙幅が尽きた。別の機会に譲りたい。

三世紀東アジアの文物をさぐる

向井佑介

二〇一八年四月に森下章司班長（大手前大学教授）の主宰により「三世紀東アジアの研究」班を開始してから三年あまりになる。「三世紀東アジア」という、妙に具体的でありながら、しかし漠然としてとらえどころのないテーマを掲げて、共同研究を継続してきた。森下班長と副班長の私をはじめとして考古学の研究者が多いため、日々の研究会はどうしても即物的な議論に終始しがちであるが、参加する班員の専門分野は文献史・美術史・思想史など多岐にわたるため、思わぬところで議論の幅がひろがるのは、人文研の共同研究の醍醐味だと感じている。

三世紀の中国では、後漢が滅亡して魏・呉・蜀の三国が鼎立し、やがて魏から禪譲をうけた晋により短い統一が実現する。この時代に活躍した劉備・関羽・張飛・諸葛孔明あるいは曹操といった人物については、近世の『三国志演義』などによって日本でもよく知られている。また、そのころ日本列島にあった邪馬台国の卑弥呼が魏に遣使し、親魏倭王の称号と金印紫綬、銅鏡百枚などの品々を賜与されたことは、正史である陳寿『三国志』魏書・烏丸鮮卑東夷伝（つまり『魏志』倭人伝）に記され、中学・高校はもちろん小学校社会の授業でも取りあげられることが多い。しかし、同じ三世紀の東アジアにあって、相互に関係する事象であることは間違いないとしても、三国の英雄たちの壮大な物語と、国の所在すら確定できない邪馬台国の卑弥呼との間には埋めがたい溝がある。この研究班では、歴史に登場する個々の人物に着目するのではなく、都城・墓制・儀礼・飲食・服飾・車馬といったカテゴリーごとに諸地域の文化を整理し、三世紀東アジアの文物とその特質を明確にしたいと考えている。

考古資料の状況からいえば、大量の豪華な副葬品をもつ漢代の大型墓と異なり、魏晋の墓は規模が小さく副葬品も簡素で少ないことから、三世紀の文物の実態は不明確なところが多かった。ところが、二〇〇八年

に河南省安陽で曹操高陵とされる西高穴二号墓が発掘され、さらに二〇一五年に漢魏洛陽城南郊で曹魏明帝ゆかりの皇族墓とされる西朱村一号墓が発掘されるなど、近年になって三国時代の大型墓が次々と発見され、三世紀の文物をめぐる資料状況は一変した。

いま私たちが注目しているのは、これらの曹魏大墓から大量に出土した「石牌」と呼ばれる小さな石の札で、副葬品の名称と数量が刻まれている。それらは、墓から出土する文物が、当時どのように呼称されていたかを具体的に記したものであり、文字史料と物質資料とを結びつける手がかりとなる。文献を読み、考古資料を集成し、試行錯誤しながら進めてきたこの研究班も、ようやく出口が見えてきた。

さて、昨春から流行しはじめた新型コロナウイルスの波は瞬く間に世界を覆い、その影響は少なからずこの研究班にもおよんでいる。昨年前期の授業が一段落してオンラインにも慣れてきたところで、この研究班でも対面方式とオンライン方式とを併用しながら、少しずつ共同研究を進めてきた。その過程では、会議用カメラやマイクスピーカーなどの機器を導入し、オンライン環境の整備に努めてきた。しかし、対面研究会の参加者とパソコン画面の向こうにいる遠隔地からの参加者を違和感なくつなぐのは、予想以上に難しい。

講義形式の発表はオンラインでもほとんど違和感なく実施できるようになってきたものの、対面参加者とオンライン参加者をまじえた意見交換となると途端に、音声が途切れる、声が小さくて聞こえない、誰が話しているのかわからない、ハウリングして聞き苦しい、といったトラブルが次々と出てくる。

もちろん、改めて説明するまでもなく、オンラインの研究会にはメリットも多い。遠隔地からの参加が容易になり、移動時間も節約できるし、発表を聞きながら思いついたことを手もとのパソコンや書籍で調べることが出来る。新型コロナウイルスの流行が終息しても、こうした開催方式には一定の需要があるだろう。

しかし、保守的といわれるかもしれないが、やはり顔をつきあわせて議論することには、それなりの意味がある。オンライン（および対面との併用）方式の研究会を継続してきて感じるのは、オンラインでも確かに有意義な議論はできるとしても、オンラインの研究会は雑談に適さない。雑談から研究が発展していく余地があまりない。参加者の何気ない一言から議論が発展していくという偶然は、対面のほうが起こりやすい。大学院生や若手研究者にとってはオンラインのほうが気軽に参加できるとしても、やはり対面で参加することによって得られる貴重な体験が失われているような

気がしてならない。

三年計画だったこの研究班は、新型コロナウイルス流行をはじめとする諸々の事情により、今年度末まで一年間延長することとなった。共同研究の着地点は徐々にはっきりしてきたが、オンラインをめぐる試行錯誤はしばらく続きそうである。

序跋を読む

——漢籍を見る会

矢 木 毅

電子テキスト全盛の今日でも、旧刊本の序文や跋文となると必ずしもデータベースには収録されていないものが多い。校訂の行き届いた中国の標点本には、たいてい旧刊本の序跋が附録として収められているけれども、それとてすべての漢籍が標点本として刊行されているわけではない。結局、旧時代の漢籍の書誌情報を正確に記述するためには、まずは資料の現物に即して序文や跋文を丁寧に読み解いていくしかない。今日の「あとがき」に当たる跋文には、たいてい刊

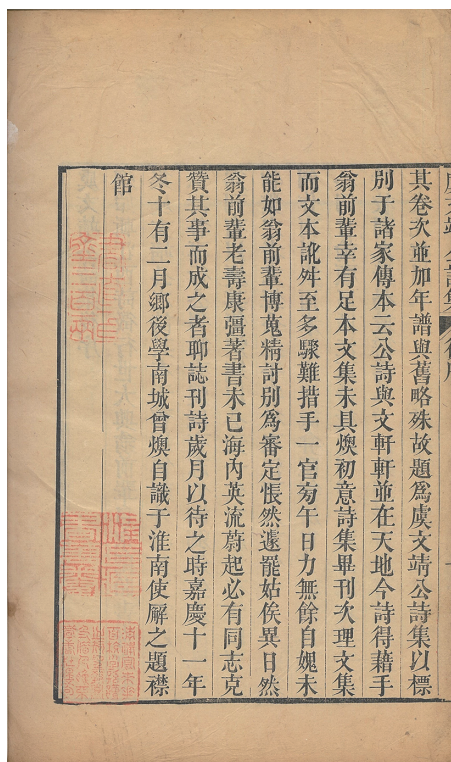
行の経緯や苦労話などが盛り込まれていて、これには同業者として大いに共感できるエピソードが少なくない。一方、「はしがき」に当たる序文は、通例、刊行者の師匠・先輩などに依頼して書いてもらうもので、なかには刊行者の跋文を丸写しにしたような手抜きのものもあるとはいえ、だいたいはその本の「解題」とするにふさわしい堂々たる文章が載せられている。

今、「堂々たる」といったのは、その文章の内容はもとより、多くの場合には序文の筆者の筆文字がそのまま模刻されているからである。達意の草書体でさらさらと書かれているものも少なくない。こうなると「当用漢字」一本鎗で教育を受けてきた私のような世代のものはたちまちお手上げとなってしまうが、それでも序跋を読まなければその漢籍のことはわからないので、書道字典を首っ引きでなんとか食らいついでいくしかない。

かくてはならじと奮発した私は、分館の中庭の池のほとりで古今の名筆の模写に励み、ために中庭の池の水は真っ黒になってしまった……というのはもちろん嘘。実際のところは「草訣歌」の類をえんぴつでなぞり書きして、なんとか崩し字の基本を頭に入れ、あとはひたすら書道字典を引き倒してその場その場をしのいでいく。

それでも何とか序文を読み終わると、最後には序文の筆者の雅印が麗々しく模刻されており、これは例のはんこの文字（篆書）で書かれているので、ここでもはたと行き詰まってしまふ。しかし、これを読み解かないと筆者の字号（あざなや雅号）がわからないので、書誌情報を拾うためにはどうしてもこの篆書の基本も習得しておかなければならない。

そこで再び奮発した私は、段玉裁『説文解字注』を讀破して韋編三絶……というのはこれも嘘で、とりあえずは主だった部首の字形を頭にいれ、あとは『康熙



『虞文靖公詩集』（人文科学研究所蔵）巻末の蔵書印

上から順に、「書直白金三百両」、「洪氏藏書萬卷」、「清俸写来手自校、子孫誦之知聖教、鬻及借人為不孝、唐杜暹句」とある。唐の杜暹の故事は蔵書家たちが好んで引用したものの。しかしそれが研究所に架蔵されているということは……

字典』や『訂正六書通』などをあてずっぽうに引き倒して、またしてもその場その場をしのいでゆく。

ともあれ、このはんこの文字になれておくと、研究所の漢籍のものととの持ち主（旧蔵者）たちが捺した蔵書印から、さまざまな人物情報を引き出すことも可能となり、人と人との漢籍を媒介とした意外なつながりが明らかとなつて、そこから無限の興味が広がっていく。

せっかくのお宝を分館の書庫の中で腐らせておいては、ちが当たる。私たち「漢籍を見る会」は、京都大

学術情報リポジトリ (KURENAI) で公開している『京大人文研蔵書印譜』（現在、第四冊まで刊行済み）その他を通して、漢籍のもつさまざまな魅力を少しずつ世の中に発信していくつもりである。

「秦代出土文字史料の研究」班 の二〇二〇年

宮 宅 潔

二〇一六年度から始まった「秦代出土文字史料の研究」班は、二〇二一年三月をもって終了する。その間、岳麓書院所蔵簡の秦律と里耶秦簡とを会読し、前者の訳注を『東方学報』誌上に毎年発表してきた。残念ながら、キリの良いところまで読了することはできなかったが、続きは新たに組織する「秦漢法制史料の研究」班で読み終え、そのうえで訳注を一書にまとめる計画である。

という具合に、研究班の締めくくりを淡々と報告できるのは、ほんとうに有り難いことだと思う。厄介な疫病のために、さまざまな経済活動はもろろのこと、

教育・研究活動にも大きな支障が生じるなか、この研究班は五年計画のうちの最後の周回を、なんとか無事に走り抜けることができた。

思い返せば、二〇二〇年の一月、新型肺炎のニュースが報ぜられたときには、何ともいえない不安な気持ちにとらわれた。ただし、それは現在の事態を予見したからではない。疫病の発生地が武漢だったからである。中国秦漢時代の竹簡・木簡は、多くが湖北省の遺跡から発見されていて、その省都にある武漢大学は、湖北省で出土した、さらには中国全土で見つかった竹・木簡の研究の、重要な研究拠点となっている。武漢大の簡帛研究センターとはかねてから交流があつて、多くの友人が武漢で暮らしていたし、また班員の一人も、ちょうど武漢大学に留学中だった。

大丈夫かなと気をもんでいると、都市全体が封鎖されたという一報が入ってきた。事態が極めて深刻なのを知って、思いつく限りの友人にメールを送って近況を尋ねたり、留学生に帰国を勧めたりする日々が始まった。友人たちのなかでも、いちばんお世話になっていている先生ご夫妻は、たまたま春節の休暇を利用して日本へ観光に来ていて、帰国できなくなったお二人のために、京都の宿舎を手配したりもした。

無事に宿舎には入ってもらえたが、とはいえ観光ビ

ザは一ヶ月で切れてしまう。延長はできないものかと、何度も出入国管理局に電話した。だが、最初は「柔軟な対応」を打ち出していた当局も、突如として「中国の他の都市には帰れるはずだ」と言い始め、一度はご本人と連れだって入管に出頭してはみたものの、とりつく島もなかった。未知のウイルスであったがゆえに、万が一にも人にうつしては困ると、先生ご夫妻はなるべく人と会わないようにされていたので、結局顔を合わせたのは入管での一回きりで、ビザが切れる直前に、お二人は中国へと帰ってゆかれた。

そのうち留学生の方は特別便で日本に戻り、これで一安心だと思っていたら、こんどは日本の方がたいへんなことになってきた。研究班には大阪や神戸からの参加者も少なくなく、長距離の移動が心配な方もいらつしやるだろうと、春休み前の研究会は「自主参加」に切り替えた。それでも大阪から、マスクなしで平然とやってこられる、肝のすわった班員もおられた。そのころは日本人よりも中国人留学生の方がよっぽど神経質になっていて、マスクなしの日本人とは対照的に、彼らの手には使い捨てのビニール手袋がはめられている。

春がやって来ても状況は好転せず、逆に緊急事態宣言なるものが発せられた。ここで研究会中断の危機を

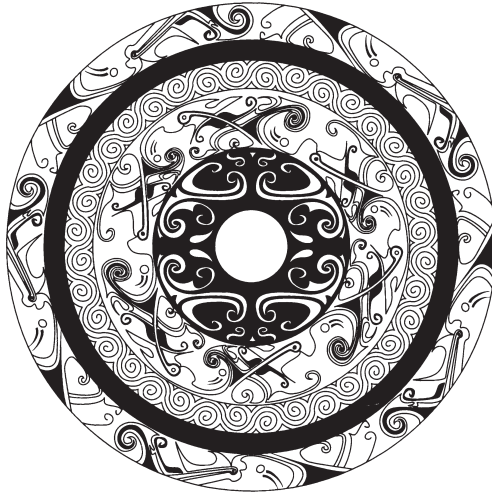
救ってくれたのが、いまや誰しも活用しているオンラインの会議システムである。そのころはまだ、どうやって使うのか私はまるで知らなかったけれども、ともかく一夜づけで勉強し、四月の第一週から見よう見まねで利用を始めてみたところ、次の週からはすべての班員がオンラインでの会議に参加できるようになった。それから今に至るまで、予定していたとおりに毎週の研究会を継続している。

オンラインでの研究会がうまくいくかどうかは、研究会の内容や雰囲気によるところも大きいだろう。誰かが一方的にしゃべり続けるスタイルだったり、質疑応答を沈黙が支配するような雰囲気だったりすれば、やはりオンラインは難しい。だが出土史料を会説する本研究班では、担当者の発表と討議とがほどよい間隔で入れ替わる。また長く会説を続けてきた仲間同士だから、討議の際にもみなさん余計な気兼ねなく、率直に考えを口にしてくださる。そのうちチャットや資料共有の機能にも慣れてきて、対面とほぼ変わらない濃度で意見交換ができてるように、私自身は感じている。

さらに嬉しいことには、オンラインを始めたおかげで、かつての仲間と再び顔を合わせることができるようになった。以前研究所に在籍していた外国の元班員

が、中国から、あるいは韓国から、研究会に参加してくださいになったのである。なかには日本語でコメントを用意し、それをチャットに貼り付けながら、ご自身の意見を説明される方もいて、その積極的な参加姿勢には、ひたすら感謝している。これまでは十分な資金と、周到な調整がなければ実現しなかった学術交流が、いまや気楽に、毎週のこととして行えるようになっていて。引きこもりがちな単調な生活のなかで、実は大きな変化が、相当な速度で進みつつあることを、身をもって感じる瞬間である。

この一年、多くの人たちが思わぬ事態に苦しめられていて、私もまた、先の見えない閉塞感のなか、時には漠然とした不安にとらわれる。そんな毎日にも、前と変わらぬこと、むしろ以前よりもよくなったことはもちろんあって、その一つに「研究班」を挙げることができるのは、ほんとうに幸運であると言うよりほかない。



トツテトラレテ

都 留 俊太郎

研究班の例会終了後、近場で懇親会の開催といきたいところだが、現状ではそうはいかない。しかし、軽食をつまみながらオンライン懇親会というのものなんとも侘しい。そこで、現代中国研究センターでは時に仕出しを注文して例会の終了時刻に届けてもらい、所員は各自の部屋でこれを楽ししながら懇親会にアクセスしている。美食とは程遠い食生活を送っている私にとって仕出しはほとんど縁がなく、非常時の便法とはいえず、これに舌鼓を打つのはなかなかの贅沢である。

毎回少しでも考えてしまうのは、食後の器の返却についてである。センターの例会は金曜午後に開催され、翌日は入口が施錠されているから、所内まで器を回収しに来てもらうわけにはいかない。そこで、重ねた器を研究所入口脇に置いておき、翌日午前中に店のひとに回収してもらうわけだが、置いている間に器が誰かに盗まれてしまわないか若干心配なのである。店のひとは、食後、外に重ねて置いておけば大丈夫です、翌

朝持つて帰ります、とおっしゃる。しかし、はじめて注文したときは夜半、外に放置するのをためらって、翌日は土曜日にもかかわらず朝方に出勤してから置いたのであった。二回目の注文以後、ようやく夜のうちに器を外に放置できるようになった。

気にしすぎだといわれればそれまでだが、これは私の性格というよりはフィールドで培われた感覚によるものかもしれない。私は、博士課程の二年余りを台湾農村部のある一軒家に住み込んで過ごしたのだが、現地の家の軒下という場は私が知る日本のそれとは大きく異なるものであった。軒下に置いてある物は他人が勝手に持つて行つてよいものとしてしばしば認識されていた。入居するために引越作業をしている際、勝手に持つていかれてしまうので不用意に家財道具を外に置きっぱなしにしないように、と同居人（宣教師）から忠告された。実際、そのような、いつのまにか持つていかれてしまう事例は時折耳にすることがあった。書き溜めた古い日記を整理しようと一時的に外に置いていたら、古紙とみなされて誰かに勝手に持つていかれてしまったというような話である。

とはいえ台湾農村は物盗りのはなはだしい、殺伐とした場ではもちろんない。軒下は誰もが立ち寄れる空間であり、またそのように営まれた暖かいスペースで

あった。いくつものプラスチックの椅子や木製の長椅子が無造作に置かれていて、誰でも座ってよいことになっている。私の家の脇は風通しがよかったので、近所のおばあさんたちが椅子を勝手に持っていくて、そこで涼んだり、昼寝したり、談笑していることもよくあった。外出していた私が家に帰ってきてその場に出くわせば、「おかえり、今日はどこに行っていたんだい」と全く悪びれずに「調査」される始末である。私もまた他の家の軒下に座って、会話に加えてもらった、はたまたおばあさんが見事に魚や肉を捌くのを眺めたり、そしてたまに昔話を聞いたのであった。

とつてとられる空間が台湾農村の特徴かと思うこともあったが、案外にそうではないのかもしれない。京大の構内にはイチヨウが少なからず植えられているが、近隣住民が銀杏の実を拾っているようである。彼ら彼女らはもちろん大学にあらかじめお伺いをたてているわけではないだろう。大学の授業とて前もってお膳立てされた知識を教員が与えて、受講者がこれを「頂きます」とおさめるわけではない。学生は往々にして教員が思いもよらぬものをいつのまにか盗っているのであり、また教員も学生から勝手に刺激をもらっているのである。一方、大学がタテカンを勝手にとつてしまうことはどうか。彼らは石垣を自分の管轄だと

僭称し、他人が勝手に利用することを禁じている。彼らの貧しさは、とつてとられる豊穡を忘れたことにあ

る。
とつてよいもの、とつてはならぬもの。とれるもの、とれないもの。いずれもその空間の流儀にかかわる。三月、数名の所員が退官されるにあたって、廃棄する予定とおぼしき書籍を本館一階の階段脇においていた。私はその一部を適当に見繕ってことわりなくとつていくことができた。着任一年、どうやら私もようやく人文研に慣れてきたようである。

…と思ったのだが、どうやらまだまだらしい。やはり引越作業にかかわって四階エレベーター脇の部屋に研究書が大量に置かれていたのだが、持っていくてよいとの話を経験豊富な某助教氏から耳にした。そこで遠慮なく持ち出していたところ、持ち主氏に目撃されて難色を示されてしまった。といつても、氏は「少しなくなるのは仕方ないけれど、たくさんはちょっと…」などとおっしゃっていたので、私のとる分量あるいはとり方が要領を十分に得ぬものだったからかもしれない。引き続き、未知に向かつてからだを開きながら、とれるものはこっそりこっそりとつていくつもりなので、皆さんひとつよろしく。

パンデミック下における「家庭」^{ホーム} 雑考

直野 章子

There is no place like home.

パンデミック下の現在、そう思える人は、よほど恵まれていないに違いない。「あなたとあなたの大切な人を守るためにステイホーム」と要請されるけれど、他人を避けて、家族と家にもつている方が、本当に安全なのだろうか。それは、誰にとつての安全なのだろうか。家族以外の他者と「密に」接することで生き延びている人は、どうすればいいのだろう。次々と疑問ばかりが浮かんでくる。このモヤモヤした気持ちを、女・親として、そして、合衆国で暮らしたことのある^{バシントン・カラー}有色の者として、「家庭」^{ホーム}に焦点を当てつつ言語化してみたい。

家庭は誰にとつて安全な場なのか？

多くの女性にとつて、家庭は安全な場ではない。WHO レポート（二〇一八年）によると、世界の女性の

三人に一人は身体的あるいは性的暴力の被害者だという。日本も例外ではなく、内閣府調査（二〇一七年）では、女性の五人に一人が配偶者から身体的暴力を受けたことがあると回答した。しかし、女性に対する暴力は、これほど広範にみられる人権侵害でありながら、被害が報告されることは稀である。加害者の多くが被害者のパートナーだからだ。DVは、親密圏のなかに閉ざされて、被害者の悲鳴が届きにくい構造をもっているのだ。

新型コロナウイルスの感染が広がり始めた二〇二〇年春には、世界各地でDV増加が報告され始めた。日本でも、緊急事態宣言下の四月と五月、DV相談件数が前年度に比べてそれぞれ四五％、五八％増加、六月には六六％も増えたという。二〇二〇年度の相談件数は十一月時点で十三万件を超え、過去最高となった。相談者のうち未成年の子どもと同居しているのは二八％、その六割で子どもに対する虐待もみられたという。これはあくまでも、相談件数である。悲しいことだが、実際には、もっと多くのDVや児童虐待が起きているはずだ。家にとどまり、家族以外の他者との接触を遮断することとは、感染拡大を防ぐには必要なのかもしれない。しかし、感染防止対策によって、多くの女性や子どもが逃げ場を失い、家庭という密室のなかで、家族から心

身を傷つけられているのだ。

家庭は誰にとって安らぎの場なのか？

内閣府調査では、緊急事態宣言下で家族と過ごす時間が増えた人は、そうでなかった人に比べて「子育てのしやすさ満足度」も「生活全体の満足度」も低いという結果となったが、女性の低下幅の方が大きく、男女差が出た。家族と一緒に時間が増えて、父親も母親も（恐らく子どもも）息苦しさを感じたが、特に母親の間でストレスが高まっているのだ。それも当然だろう。三月からの突然の休校に始まり、六月の学校再開まで、母親たちは三度の食事作り（給食がなくなっただ）、子どもの遊び相手、学習指導（公立では学校から家庭に丸投げされた）をしながら仕事をこなした（あるいは、休職・退職に追い込まれた）。日々の再生産労働と賃労働をこなすだけでも目が回りそうなのに、加えて保育士や教師の役割を担うことになったのだ。しかし、パンデミック下の社会を支える母親たちの労働を「エッセンシャル・ワーク」とみなして評価する声を耳にしたことはない。家庭を維持し、子どもをケアするのは母親として当然とみなされているからだだろう。ここにも、コロナ以前からある構造的な不正とそれを不可視化する社会意識が現れている。

パンデミック前のデータをまとめたOECDレポートによると、いずれの国においても、六歳未満の子どもがいる世帯では、女性が再生産労働に従事する時間は、男性に比べて長い。しかし、日本の場合、女性は一日平均七時間三四分、男性は一時間二三分と、女性が男性の五・五倍の時間を再生産労働に費やしており、他国に比べて突出して差が大きい。（韓国の四・四倍が日本に続く。）パンデミック下の「ステイホーム」で変化の兆しが見えたが、通勤再開で元に戻ってしまった。男性が再生産労働の過酷さを知ること、意識の変化が生じることはあっても、個人の意識だけで構造的なジェンダー不正を変えることはできないからだ。

家庭は誰にとって侵されざる（私的）空間なのか？

ジェンダー不正は合衆国でも深刻だが、それ以上に、あるいは、それと重なり合うようにして、人種主義が社会を蝕んでいる。「ホーム」に関わる場所では、次のようなデータがある。白人の自宅所有率（二〇一九年）は七三％と高いが、アフリカ系アメリカ人は四二％と低い。白人の場合、ホームレスは人口一人あたり十一人（〇・一％）なのに対して、アフリカ系アメリカ人は五四人（〇・五％）と、ホームレスの

出現率でも、人種間で大きな違いがある。感染を避けようにも、家賃が払えずに追い出されたり、そもそも住む家がなければ、大きなリスクに曝されることになる。構造的な人種主義は、パンデミックがもたらす危機を平等に配分しはしないのだ。

ホームがあつたとしても、安全が保障されるわけではない。合衆国でも感染が広がり始めていた二〇二〇年三月十三日未明、ケンタッキー州ルイヴィルで、二六歳の救急救命士、ブリアナ・テイラーさんが自宅で警官に撃たれて死亡した。またしても、白人警官の手によって、アフリカ系アメリカ人の命が奪われたのだ。詳細は省くが、警官は判例法上の規則を遵守せずに、テイラーさんの自宅に突入して三二回も発砲した。安全な場であるはずの自宅ホームで、法の執行者の顔をした不法侵入者によって、彼女は殺されたのだ。奴隷制に始まる長い人種主義の歴史のなかで、ホームは、アフリカ系アメリカ人が人種暴力レイシャル・ヴィオレンスから逃れられる（私たちはDVに曝されるものだが）安全地帯の象徴であつた。人種主義は、生き延びるための空間にまで手を伸ばし、有色の人々の安全地帯を奪っているのだ。家庭は私たちを守る場所なのだろうか。「ホーム」からみえてくること。それは、この暴力と不条理は、パンデミックが作り出したものではないということだ。

お帰りなさい、外人さん！

フォルテ・エリカ

歴史的パンデミックに世界が右往左往していた二〇二〇年一〇月。旅をする―ましてやオーストラリアから日本へ転居する―のに最も適したタイミングだったとは、言えないだろう。

先の見えない不安定なこの時代において、京都大学人文科学研究所教授を拝命したことを、非常に幸運なことだと感じている。だが、「二〇二〇年七月に京都へ海外転居する」という計画で準備を進めていた私たち家族の日本入国許可発行手続きは、コロナの影響によって遅々として進まず、結局、私たちが京都辿り着いたのは、二〇二〇年一〇月のことだった。当時、日本政府は、コロナウイルスが日本に蔓延することを防ぐための水際措置として、外国人の日本入国を数ヶ月にわたって完全に禁じていたのだ。長年にわたり日本で働き生活する「外人（＝外人の人）」や、または日本人との結婚で日本に家族がいる数え切れないほどの「外人」たちが、二〇二〇年二月前後、「日本国外に―

時的に出国しよう」という間の悪いことを考えてしまったがために、日本の「外」に締め出されてしまう事態が起きていた。このような話を聞かたびに、コロナが日本人と「外の人」の間にそびえる目に見えない壁を、まざまざと見せつけていることを感じざるを得ない。「外人」といつても、二つのタイプが存在する。外からやってきて、外に属しているタイプと、外からやってきて、内（＝日本）に属するタイプだ。

「外人」という言葉は、私にとってなかなか親しみのあるテーマだ。実際、私は「外人」としての長いキャリアを持っている。イタリア人の両親をもち、イタリア国籍を持つている私は、法律的に見れば、疑いの余地なく「外人」だが、人生の不思議な巡り合わせで、私は京都で生まれた。当時、父は日本での研究のための奨励金を得て、結婚したばかりの新妻（私の母）を連れて日本へ渡航することを決めた。イタリアを出国した時、彼女のお腹に小さな命が宿っていることを、二人はまだ知らなかった。そして、京都に到着してから七ヶ月後の春、私が生まれたのだった。そんなわけで、私の人生の最初の知覚経験は、京都の光や桜や沈丁花の香り、梅雨の長雨、蟬や蛸の鳴き声に満たされることとなる。生後六ヶ月でイタリアへ帰国した私は、これらの記憶を覚えてはいないが、人生の初めに受け

たこれらのインプットは、私の中に、確かに今も生き続けている。その後日本に帰国することとなったのは、七歳の時。父が京都での仕事に就いたため、以前に比べて、長い滞在となった。私たち家族は、最初に近衛通り、次に北白川通りの近くに住んだ。私は、地元の公立小学校に通い、日本語を話すよりも先に京都弁を話し、日本のテレビ番組を観て、日本人の友達と遊び、日本人の子どもと共に学んだ。その時から二〇〇六年に至るまで、京都とイタリアを行き来するのが、私の日常となる。京都は、私にとってのもう一つの故郷であり、左京区は私の地元といえる場所なのだ。このような生い立ちから、私は自分自身を「外から来た人」とは認識していない。だが、一〇〇％メイドインイタリアの京都出身者の立ち位置は、どのタイプに属すれば良いのでしょうか。いつそのこと、私のような人を「内人」、または「内外人」と呼ぶのはどうだろうか？

二〇〇六年、父が他界。母はイタリアに帰国し、私は翌年にウィーン大学での六年間の研究プロジェクトに参加するため、オーストリアに移り住んだ。その後、京都に「里帰り」する機会は大幅に減少してしまった。ウィーンでは、これまでにないほどに自分自身が「外人」だと感じた。今回は外見の問題ではなく、ドイツ語、そしてオーストリア文化への無知に由来していた。

日本にいた時と全く逆の経験を、今度はホームグラウンドであるはずのヨーロッパで経験していたのである。私の「外人」キャリアにおいて、一番面白かった体験は、ウィーンに住んで数年後、母が住むローマに里帰りした際に起こった。実家の近所を散歩していると、通りすがりの店員が、英語で声をかけてきた。なぜ英語で話しかけられているのか疑問に思いながらも、英語での会話が続く。出身はどこなのかを聞かれたときに、すぐ近所に住んでいることを伝えると「ええ?! ローマ人なのかい?! ジャあ、どうして英語で喋っていたのさ!」と仰天された。「あなただって英語で話しているじゃないですか!」。私たちは目を見合わせて大笑いした。彼は、私の歩き方が外国人観光客のように見えたのだと、後から教えてくれた。結局のところ、私はイタリアでも「外人」に見られてしまうらしい。時と共に京都との繋がりはおぼろげなものとなり、このままウィーンが私のホームになっていくのだと思っていた。だが、人生は予測しなかった方へと私たちを導いていく。

時を経て、私は再び、京都に戻ってきた。これを一般的には「新たな始まり」と呼ぶのだろうか。だが、「新たな」という言葉は適切ではないのかもしれない。過去に置き去りにした「懐かしさ」と、当時とは全く

違う「新鮮さ」のなかで、私の感情も揺れ動き続けている。十五年以上の時を経て、京都も、そこに住む人たちも、大きく変わった。懐かしい街並みはもうそこにはなく、時には知らない場所に来たかのような錯覚すら感じる。ある意味では、懐かしい故郷に帰ってきたのだが、別の意味では、当時の私が経験してこなかった未知のチャレンジに、日々向き合い続けている。それはつまり、「内人」としての私よりも、「外人」と

しての私の方が、社会と向き合わざるを得ない状況にいるということだろう。四歳になる息子は、四ヶ月前から地元の幼稚園に通いはじめた。彼はまだ日本語を話すことはできないが、それもきつと時間の問題だ。先生からの温かく「おはよう」の声に迎えられて、幼稚園の門をくぐる息子を見るたびに、当時の自分自身の姿が重なっで見える。数年後、彼はこの経験をどんな風に語るだろうか。きっと、自分の人生を豊かに形成してくれた良いものであったと語ってくれるだろう。今の私自身が、そう感じているように。京都に到着しすぐに、十歳の時から私を知っている知人に電話をかけた。「もしもし、エリカです」。彼女は何も聞かず、たった一言、温もりを込めて私に言った。「お帰りなさい」。

神が降りる

藤原辰史

不惑の年を超え、四十肩に苦しみ、腰痛に悩まされ始めた私は、いよいよ人生振り返りモードに突入したらしい。少し暇な時間が生じると、すぐに自分の人生のここがいけなかった、ああしとけばよかった、と考え始めるようになった。

その中でも後悔の度合いが比較的激しい過去の経験は、ソフトテニス、つまり軟式テニスである。私は、中学校から大学院まで貴重な十二年間を、このマイナーな競技に捧げてしまった。あるうことか、硬式テニスではなく軟式テニス、ボールは白いゴムボールである。中学校までは人気なスポーツだったが、律儀に大学までやらなくてもよかっただろうに、もつと英会話とかできただろう、と過去の自分を責め始めている。

しかも中学校も高校もレベルが高くて練習が厳しいので、貴重な土日や休みも全部ソフトテニス一色だった。田舎の学校なので娯楽がなかったのも禍の理由である。高校までは補欠だったのもまた暗い過去をいっそう

暗くする。上手な後輩たちにどんどん抜かれ、団体戦には一度も出られなかった。その鬱憤を晴らすために、大学でも体育会のソフトテニス部に入部し、吉田山をダッシュで登り、南禅寺まで観光客のあいだを疾風の如く走って、吉田コートでの厳しい練習を耐え抜いたが、京都府の学生選手権で三位、京都府の一般選手権でも三位と主観的には誇らしくても客観的にはぱっとしない成績で私の青春は過ぎ去って行った。ソフトテニスを知らない人にこの業績について説明を試みても、すごい、という言葉の次の言葉が継がれぬまま、会話が立ち枯れていく哀れさに耐えられず、最近話題にしないように心がけている。

しかも、ソフトテニスはテレビ映えがしない。同じソフトテニス経験者の映像アーティストが、テレビで珍しくソフトテニスの試合が放送されていたので観賞した時の話をしてくれた。テレビの前に座ると、カット・サーブから入る人が多く（わたしは邪道だと思っているが）、ラリーも長く続かず、見た目が全然華やかではなかったらしい。ソフトテニス経験者の映像作家にとって見るに耐えないというのが哀しい。

硬式と比べると打ち方も妙にくねくねしていて、迫力に欠ける。オリンピック種目になるために、海部俊樹元首相を組織のトップに据えてロビー活動をし、ル

ールまで変えてテレビ映りをよくしようとしたのだが（これにも私は反対だった）、結局無理だった。

そんな地味スポーツをやってきた過去をほとんど呪いかけたくなるが、一方で、呪い殺せない自分も発見する。ああ、このやろう、お前のせいで俺はこんなことになったんだ、と友人を罵ったあとに、いやごめんねと背中を撫でてしまう、あの感じである。

というのも、ソフトテニスには私に尋常ではない神秘体験を授けてくれたことがあるからだ。これは人生で二回だけの、文字通り、神が降臨する感覚である。

一回目は、高校三年生の部内のトーナメント戦のとき。私は当時七番手の後衛だった（団体戦は三番手までしか出られない）。準決勝で一番手のペアと対戦したが、相手のボールに対して私は勝手に腰が沈んで、重心が低くなつて（そうなるとラケットがボールの下から出てくるのでネットしにくい軌道のボールになる）、左肩が自然に入り（体にタメができる）、ラケットで打っているという感覚がないのに腰を捻るだけでボールが向こうに飛んでいって驚いた。コートを上から見て自分を動かしている感覚。前衛の内田くんも、私の今までにないリズムに完全に同調して、信じられないスマッシュを連発して、圧勝した。決勝も今まで勝ったことがなかった二番手のペアをほとんど苦もな

くやつつけてしまった。どちらも、全身力が抜け、誰かが私たちを操っているような感覚だった。

二回目は、大学三回生の関西大会。私は主将を務めていたが、前日の団体戦が絶不調でペア間の関係が冷え切っている状態で臨んだ個人戦だった。格上の相手ゲームカウント四―四のとき、相手の前衛のボレーが決まったあとツーバウンドで打ち返したら、喜んでいた前衛の頭の上にポトンとぶつかり、相手が逆上してから主導権がこちらに移った。相手が怒りで自滅して、試合に勝ってしまったのである。神が降臨したのは次の試合だった。相手はのちに全日本の大会で三位になるほどの強敵である。冷え込んでいたペアとの関係も修復し、私も心身ともにリラックスしていた。高校の時と同様に、左肩を入れただけに勝手に勝手に相手のラケットが前に出て、相手のスピードボールをすごいスピンをかけて返せた。相手の打ち返してくるポイントも察知して、すぐに足を動かし、テンポよく打ち込むので、ペアの前田くんも絶好調でボレーを決めまくったのである。誰かが私たちを動かしている、と私は感じた。惜しくも負けてしまったのだが、雲の上を走っているような、なんだか幸せな時間だった。

だが、そのあとはあのようなトランス状態は二度と訪れなかった。私が二流選手である所以である。厳し

い練習を繰り返して、頭が真っ白になって、見えざる神の手で動かされているような感覚をずっと求め続けたが、大学院生のときに最高の成績を得たときも、あのような感覚ではなかった。

どちらの日も疲れが極限まで来ていて、風がなく、曇り空だったことだけを覚えていて。研究者になって、本を書いているときに、絶好調のときは、誰かが私の体に乗っ取って書いているように感じることもないわけではないが、やはりあの感覚とは程遠い。

もう二度とあの境地には達することはできないのだな、と思うとなんだか寂しくもなる。たまに現役学生とラリーをして、頭が真っ白になり、力が抜けることもあるが、それは単に運動不足ゆえの酸欠にすぎない。ただ、諦めの悪い私は、風がない曇り空の日にラケットを握りたくなる自分と、もう少し付き合ってみたいと思う。マイナースポーツとの腐れ縁は、まだ完全には切れない。

「所のそと」に出るにあたつて

池田 さなえ

世の中で「知性」の居所がいよいよ悪くなってきたようだから、「知性」の尖塔に位置する人文研に場違いながらも五年ほど身を置いた者として、個人的見解を述べなければならぬと考えている。とはいえこれを語るには限られた紙幅では足りないもので、その糸口として、ある作品の話をしたい。私の十年來の愛読書『進撃の巨人』（以下『進撃』）である。以下、内容に立ち入った話をするので、ネタバレを避けた方は回れ右をお願いしたい。

『進撃』の世界の人々は、三重に囲まれた壁の中で生きている。壁の外には人を食う巨人がいるが、巨大な壁に守られてもう百年以上も人々は平和な暮らしをしていた。壁内は王制が敷かれ、王都を守る憲兵团・各地の壁と治安を守る駐屯兵团・そして壁外に出て巨人の正体を突き止めようとする調査兵团の三つの兵团組織が置かれていた。この物語の主人公・エレンは、壁外世界を知り、巨人を駆逐するために調査兵团に入

団する。

壁内では、壁や巨人の存在を疑うことはタブーであったが、そのタブーに逆らって世界の成立や真実を追い求める人々が一定数存在した。調査兵団はそのような人々の存在を受けて、王政府によるガス抜きとして誕生したという特異な成立背景を持つ。

しかし調査兵団は、壁内世界の中では鼻つまみ者であった。壁外調査に出るたびに巨人に多くの兵を食われ、大した成果もなく損害ばかり重なる「税金泥棒」――多くの人々は調査兵団をそのように見ていた。大半の人々は、百年以上も平和が続いたのだからこれからもそれが続くだろう、巨人が襲ってくるのがあったとしても、それは自分の生きているうちには起こらないだろうと考えていた。むしろ、重傷を負ったり命を落したりしてまでこの世の真実を知ることが愚かしい、と考えていた。

ところで、『進撃』の世界には、実は鏡写しのもう一つの世界があった。壁内世界はパラディ（楽園）という名の島で、海の外には大きな大陸があり、そこにはマーレという軍事大国があったことが物語中盤で明かされる。壁内人類は実はエルディア人という巨人になれる民族で、大陸ではエルディア人は迫害されていた。エレンの父・グリシャはマーレの収容区で生まれ

育ったが、妹に飛行船を見せるために収容区から出たことで当局に妹を惨殺されてしまう。グリシャ自身もまた後に民族復権運動を主導した罪で逮捕され、拷問の末「楽園送り」にされる。

この世界でも、収容区のエルディア人の大半は、当局に目を付けられないように息を潜めながらも、平穩に一生を終えられたいと考えている。収容区のエルディア人は、マーレ人によって書かれた歴史書以外に自民族の歴史があることなど知ることもなく一生を終える。そして、それでもよいと思っている。

人間の短い一生でないうることなどそう多くはないのだから、きっとこのように考えるのが賢いのだろう。この物語では、そのような人の生を肯定しながらも、「知りたい」と思う心こそが人を「自由」にするというメッセージが一貫して流れている。同時にこの物語は、それには甚大な犠牲と痛みを伴うものであること、それでもなお「知りたい」という心に従って生きざるをえない人々が少数ながら確実に存在することも伝える。調査兵団の有名な旗印は「自由の翼」と呼ばれる。アニメ版一期のOPテーマでは、「家畜の安寧」は「虚偽の繁栄」であり、「死せる餓狼」であっても自由を求めよという歌詞がある。このメッセージは、原作、アニメ、テーマソング、スピンオフの中で繰り返

し語られる。

愚かにも「知りたい」と思い、壁の外に出るような人たちは、何も知らずに一生暮らせばよいと思う人たちはほとんど分かり合えない。だから、固定ファン・古参ファンさえ大事にしていれば、新規ファン層を開拓しなくてもよい、と考える者も現れる。それが正しいのかもしれない。「人文学の危機」を語る時、往々にしてこのような結論が導かれる。

しかし、これでは満足でなくなる者がまた一定数出てくる。「知りたい」気持ちが高じると、世の中の大半の、分かり合えないかもしれない人々のことすら「知りたい」「分かり合いたい」と思うようになる。こうなると、もはや味方はいなくなる。たった一人で、永遠に相容れないかもしれない人々の中に飛び込んでいくことは、恐ろしい。しかし、恐ろしいのは知らないからだ。だから、知りたいと思う。それは不可能なのだろうか？ このような問いかけが、『進撃』の終盤で前景に現れてくる。

私もきつと、少人数で壁外に乗り出し、大国マーレに潜入しようとする物語終盤の調査兵団の一部の人々と同じ種類の人間だ。愚かだとわかっていながら、外の世界を「知りたい」という心が抑えられない。理解者に囲まれて、守られて、安穩としておればよいのに、

馬鹿な奴である。これに意味なんてない。そういう種類の人間が、どこにも、いつの時代にも一定数生まれてしまうのだ。生まれてしまったから、進むしかないだけだ。

書いたもの一覧 二〇二〇年四月～二〇二一年三月（氏名五十音順） ●は単行本

浅原 達郎

管仲（斉桓公問於管仲）私読 日古 二三号 八月

●おまけの時間―中国古代の暦の十年―（八一山人） 日古別冊 八月

池田 さなえ

一二 天皇・宮中（近現代・日本・二〇一九年の歴史学界―回顧と展望―） 史学雑誌 一二九編五号 五月

●『遠隔でつくる人文社会学知―二〇二〇年度前期の授業実践報告―』（共著） 雷音学術出版 十月

近現代史部会 藩閥政治家の社会的基盤―品川弥二郎の北海道農場経営と浄土真宗本願寺派・産業界との関わりから

日本史研究 七〇〇号 十二月

川島織物セルコン・川島織物文化館所蔵「二代・川島甚兵衛

関係文書」品川弥二郎書翰 史林 一〇三巻五号 十月

御料林経営と民有下戻し―現豊田地域の事例を中心として

豊田市史研究 一二号 三月

過去を生きた「病む身体」―病をめぐる学生との対話の記録から 石井美保・岩城卓二・田中祐理子・藤原辰史編『環世界の人文文学―生と創造の探究』 人文書院 三月

池田 巧

An Introduction to Khangkha. NAGANO Yasuhiko (co-ed.) *Grammatical Phenomena of Sino-Tibetan Languages* 4. 三月

チベット語の類型論と系統論 岩尾一史・池田巧編『チベットの歴史と社会』 臨川書店 三月

石井 美保

世界を異化する力 ニューサポート高校国語 二三号 四月
センザンコウの警告 村上陽一郎編『コロナ後の世界を生きる―私たちの提言』 岩波新書 七月

書評 古川不可知著『「シエルパ」と道の人類学』

日経新聞 四月二五日

編集後記 文化人類学 八五巻二号 九月

Book Review Fabio RAMBELLI (ed.), *Spirits and Animism in Contemporary Japan: The Invisible Empire*. London: Bloomsbury Academic, 2019. *Religion and Society* 11 (1). 九月

●インド・剥き出しの世界（共編著） 春風社 三月
流動化する暴力とヒンドゥー・ナショナリズム 田中雅一・石井美保・山本達也編『インド・剥き出しの世界』

●環世界の人文文学―生と創造の探究（共編著）

春風社 三月

はじめに（共著） 石井美保・岩城卓二・田中祐理子・藤原辰史編『環世界の人文文学―生と創造の探究』 人文書院 三月

多元世界としての森を生きる―インド・西ガーツ山脈における自然保護と在来性 石井美保・岩城卓二・田中祐理子・藤原辰史編『環世界の人文文学―生と創造の探究』 人文書院 三月

石川 禎浩

談日本の中国現代史研究 澎湃新聞・思想 四月五日

風骨錚錚的翻訳生涯―追憶袁広泉先生

澎湃新聞・私家歴史 六月二二日

●梁啓超文集（共編訳）

通史と歴史像 飯島渉編『大國化する中国の歴史と向き合う』 岩波書店 八月
研文出版 八月

稲葉 穰

ガズナとフィールズクリーフ―歴史的アフガニスタンにおける「都」についての覚書― 科研費成果報告書『都市文明の本質―古代西アジアにおける年の発生と変容の学際的研究』 三月

稲本 泰生

編集後記 仏教芸術 四号 二〇二〇年三月

東アジアの寺院 『仏教事典』 丸善出版 一月
編集後記 仏教芸術 六号 三月

岩城 卓二

記念事業としての市史編纂 歴史評論 八四一 五月
著者が案内する、やきものガイドブック「博物館と文化財の危機」 陶説 八〇六 六月

●西宮神社御社用日記（共編） 四巻

環世界の人文文学（共編著） 清文堂出版 十月
人文書院 三月

ウィッテルン クリスティアン

Christoph Anderl and Christian Wittern (eds), *Chân Buddhism in Dunhuang and Beyond A Study of Manuscripts, Texts, and Contexts in Memory of John R. McRae.* 十二月

KanripōX: A tagset for connecting digital texts 東洋学
へのコンピュータ利用第33回研究セミナー 三月

岡田 暁生

●音楽の危機 中公新書 九月
●モーツァルト ちくまプリマー新書 九月

岡村 秀典

礼制的形成与早期中国——岡村秀典教授訪談録（共著） 李水城編『穿越古今 海外考古大家訪談』下 五月

一〇〇年前の雲岡石窟写真 上海古籍出版社 六月
人文 六七号

●中国文明——農業与礼制的考古学 上海古籍出版社 九月

菊地 暁

What Does it Mean to Become UNESCO Intangible Cultural Heritage? The Case of aenokoto. Aike P. Rots & Mark Teeuwen (eds.) *Sacred Heritage in Japan*, Routledge 四月

民俗学者と歩く瓜生山（対談）

webマガジン「目を凝らす」三号 六月
可能性としてのこども／風土記：『北白川こども風土記』を
中心に 人文 六七号 六月

宝塚少女歌劇と京大民俗学会：ワークショップ「帝国日本と少女歌劇」余話 人文 六七号 六月

●学校で地域を紡ぐ：『北白川こども風土記』から（共編著）

小石子社 六月

まぼろしの映画『祇園祭』パンフレット：挿絵画家・竹中英太郎の「復活」 谷川健司編『映画産業史の転換点：経営・継承・メディア戦略』 森話社 七月

京都の宗教施設を外国人に案内しよう 岩田文昭・碧海寿広編『知っておきたい日本の宗教』ミネルヴァ書房 一〇月

カラーで写された占領期の京都Ⅰ モノをはこびヒト

京都新聞 一一月二八日付朝刊
●ライフヒストリーレポート選 二〇二〇（編著）

生活史にあらわれる災害…ライフヒストリーレポートの試みから 東京大学東洋文化研究所編・発行『二〇二〇年度四

研究所合同シンポジウム アジアの災害』 一月

●記念誌 村上忠喜先生還暦記念 日本民俗学講習会（編著）

同会世話人編・発行 三月
新刊紹介 鶴野祐介著『子どもの替え唄と戦争—笠木透のラスト・メッセージ』 口承文芸研究 四四号 三月

クナウト テイル

書評 Ward, Max: *Thought Crime. Ideology and State Power in Interwar Japan*. *www.hsoskult.de* Humboldt University Berlin 八月

書評 Japan at the Crossroads: Conflict and Compromise after Anpo. by Nick Kapur. Harvard University Press, *Social Science Japan Journal* Tokyo University 八月

A Farewell to Class: the Japanese New Left, the Colonial Landscape of Kamagasaki and the Anti-Japanese Front (1970-1975) *Journal of Japanese Studies* 46(2) University of Washington 七月

〈コロナ危機〉とコンピュータ機械化 資本主義的生産様式の前史の終わりについて 現代思想 四八巻一〇号 七月

Maikon and Cyber-Capitalism: Some Preliminary Remarks
on a History of Computerization in Japan, 1960-1990
ZINBUN 51 三月

倉本尚徳

中国北朝時代における造像流行の背景にあるもの

日本学士院ニュースレター 二五号 四月

北朝造像銘—その起源と展開 歴史と地理 七三二号 五月
史語所の概要と私の研究生活 人文 六七 六月

International Conference on the Production, Preservation
and Perusal of Buddhist Epigraphy in Central and East
Asia (中亞和東亞地區的佛教金石雕造、保存與研讀) 参加
報告 唐代史研究 二三号 八月

《續高僧傳》《感通篇》譯注(五)《釋慧瑱傳》《釋洪獻傳》

古今論衡 三五 十二月

行像與行城—敦煌行城儀式起源考 唐研究 二六卷 三月

古勝隆一

香纓考 香文化録 五号 五月

漢趙劉淵家属的儒学背景 『大夏与北魏文化史論叢』

鳳凰出版社 八月

『論語』郷党「立不中門」皇疏考正 『單周堯教授七秩華誕国
際學術研討会論文集』 中華書局(香港) 十一月

『文史通義』内篇三詁注(共訳) 東方学報 九五冊 十二月
袁世の菩薩戒弟子皇帝—南朝陳における王権と仏教

東方学報 九五冊 十二月
段玉裁「古文尚書撰異序」訳注(田尻健太氏と共訳)
中国思想史研究 四二号 三月

小関隆

座談会 京大人文研90年の学知…危機の時代 生きる指針に
京都新聞 四月十六日

書評 ローベルト・ゲルヴァルト『敗北者たち…第一次世界
大戦はなぜ終わり損ねたのか 1917-1923』
西洋史学 二六〇号 十二月

佐藤淳二

書評 イメージへの使命…ミシユレと歴史の眼差し

週刊読書人 九月二五日
書評 二〇二〇年の収穫アンケート

週刊読書人 十二月十一日
フリーコ—と啓蒙…自己へのオデュッセイアの途上で 小泉義
之・立木康介編『フリーコ—研究』 岩波書店 三月

瀬戸口明久

書評 水野祥子『エコロジーの世紀と植民地科学者』

科学史研究 二九五号 十月
自然と人間のBORDER Kyoto University ACADEMIC
GROOVE Vol.2 BORDER—Humanities and Social
Sciences 京都大学人社未来形発信ユニット 二月

炭坑化する世界―空気を満たすテクノロジー 石井美保・岩城卓二・田中祐理子・藤原辰史編『環世界の人文文学―生と創造の探究』 人文書院 三月

高井 たかね

明清居住空間考―八仙卓と庁堂を中心に 武田時昌編『術数学の射程―東アジア世界の「知」の伝統―』 臨川書店 三月

高木 博志

The Restoration of the Ancient Capitals of Nara and Kyoto and International Cultural Legitimacy in Meiji Japan, Robert Heller and Harald Fuess (eds.), *The Meiji Restoration: Japan as a Global Nation*. Cambridge University Press 四月

●Kyoto's Renaissance: Ancient Capital for Modern Japan, John Breen, Maryama Hiroshi, Takagi Hiroshi (eds.), Renaissance Books 七月

近現代史のなかの映画『祇園祭』―もう一つの明治百年 谷川建司編『映画産業史の転換点―経営・継承・メディア戦略―』 森話社 七月

大正期京都のロマン主義・花街・舞妓・竹久夢二 世紀転換期の京都イメージと黒田清輝の「舞妓」―「昔語り」 京都文化博物館編『舞妓モダン』 青幻舎 十月
近代天皇制と洞村移転 『洞村「強制」移転100周年誌』

部落解放同盟奈良県連合会大久保支部 十二月
金光教と遊廓・花街 親光（令和三年度） 金光教難波教会親光会 一月

史蹟名勝天然記念物保存法の時代―政治と文化財 遺跡学研究 一七号 二月

参加する。映画『祇園祭』とその時代―映画製作上映協力会メンバーに聞く（京楽真帆子と共著） 新しい歴史学のために 二九七号 二月

大正期京都のロマン主義と竹久夢二 中川理編『空想から計画へ―近代都市に埋もれた夢の発掘』 思文閣出版 三月
「山本明氏旧蔵コレクション」（山本明社会藝能文庫）について 人文学報 一一六号 三月

高階 絵里加

映画『地獄門』と和田三造 谷川建司編『映画産業史の転換点―経営・継承・メディア戦略』 森話社 七月

竹沢 泰子

Racialization and Discourses of "Privileges" in the Middle Ages: Jews, "Gypsies", and Kawaramono, *Ethnic and Racial Studies*, 43(16) 四月

座談会 トランプと移民問題 アメリカ研究 五四号 四月
肌の色で生死分ける米の構造 朝日新聞 六月二四日
そこが聞きたい 米黒人暴行死の背景 旧居住区政策、格差 毎日新聞 七月七日
なお

- Special Issue. Trans-Pacific Minor Visions in Japanese Diasporic Art. Y. TAKEZAWA & I. KINA. Guest Editors. *Asian Diasporic Visual Cultures and the Americas* (ADVA), 6: 1. 七月
- Major and Minor-Transnationalism in Yoko Inoue's Art: Power Dynamics and Practices of Co-production. Special issue: Trans-Pacific Minor Visions in Japanese Diasporic Art. *Asian Diasporic Visual Cultures and the Americas* (ADVA) 6: 1. 七月
- 米国の黒人暴行死の背景と反人種差別運動 商工ジャーナル 十月
- 生物学的には「人種」は存在しない 月刊保団連 No. 1332 十月
- ブラック・ライブズ・マター運動の背景と意義 国際経済労働研究 十月
- 書評 Book Review of *In Search of Our Frontier: Japanese America and Settler Colonialism in the Construction of Japan's Borderless Empire*. by Eiichiro Azuma. *Ethnic and Racial Studies*. 十月
- 中世におけるユダヤ人・「ジプシー」・河原者をめぐる「特権」言説 部落解放研究 二二三号 十一月
- 百花繚乱—ひょうごの多文化共生150年のあゆみ (共編著) 兵庫県制150年記念刊行事業 神戸新聞総合印刷 十二月
- 第一章 兵庫の多文化共生概観 竹沢泰子・樋口大佑・兵庫県国際交流協会編著『百花繚乱—ひょうごの多文化共生

- 150年のあゆみ』 神戸新聞総合印刷 十二月
- コラム GONGO—自治体とNGOの協働の先駆 竹沢泰子・樋口大佑・兵庫県国際交流協会編著『百花繚乱—ひょうごの多文化共生 150年のあゆみ』 神戸新聞総合印刷 十二月
- コラム 外国人学校等の炊き出し 竹沢泰子・樋口大佑・兵庫県国際交流協会編著『百花繚乱—ひょうごの多文化共生 150年のあゆみ』 神戸新聞総合印刷 十二月
- 第四章 外国人の多様化 竹沢泰子・樋口大佑・兵庫県国際交流協会編著『百花繚乱—ひょうごの多文化共生 150年のあゆみ』 神戸新聞総合印刷 十二月
- 巻頭言 (日本学術会議多文化共生分科会) 外国人の子どもの教育を受ける権利と修学の保障について NGO 神戸外国人救済ネット・ニュース 六七 一二月
- 人種とヒトの多様性—学校でのまなびのために— 中山京子ほか編『人種』『民族』をどう教えるか—創られた概念の解体をめざして— 明石書店 一月
- 生物学的グラデーションと社会的境界 京都大学学術研究支援室 (KURA) 編 *Kyoto University ACADEMIC GROOVE Vol. 2 BORDER—Humanities and Social Sciences* 京都大学人社未来形発信ユニット 二月
- 人種と人種差別—自然人類学と文化人類学の対話から 井原泰雄・梅崎昌裕・米田稜編著『人間の本质にせまる科学—自然人類学の挑戦』 東京大学出版会 三月
- Race, Civilisation and the Japanese. Textbooks During

the Meiji Period. *POLITIKA*, Paris: École des hautes études en sciences sociales. 三月

RACE ET CIVILISATION AU JAPON. Les manuels scolaires à l'ère Meiji. *POLITIKA*. Paris: École des hautes études en sciences sociales. 三月

ブラック・ライプズ・マターと日本 すべての人にとつての人種問題とは TOKYO 人権 八九号 三月

立木 康介

書評 ラカンと生きる、ラカンから生まれる——カトリクス・ミーヨ『ラカンと生きる』について 思想 九月号

翻訳 ファリップ・サボ『ミシェル・フーコーと真理のアヴァンチュール』 思想 十月号

●女は不死である——ラカンと女たちの反哲学

囚われ人たちのスケープゴート 河出書房新社 十一月 群像 二月号

●フーコー研究（共編）

『精神分析の考古学』の行方 小泉義之・立木康介編『フーコー研究』 岩波書店 三月 岩波書店 三月

●ミシェル・フーコー『コレージュ・ド・フランス講義』を読む（共編）

パレーシアと精神分析 佐藤嘉幸・立木康介編『ミシェル・フーコー『コレージュ・ド・フランス講義』を読む』 水声社 三月 水声社 三月

翻訳 エマニユエル・ドリーール「脳科学の歴史と精神の科学

の歴史をひとつの全体として考える——ミシェル・フーコーの「精神医学の権力」における神経学的身体の出現」佐藤嘉幸・立木康介編『ミシェル・フーコー『コレージュ・ド・フランス講義』を読む』 水声社 三月

まなざしの環世界——「見る」と「見られる」のキアスム 石井美保・岩城卓二・田中祐理子・藤原辰史編『環世界の人文学——生と創造の探究』 人文書院 三月

Introduction pour le dossier spécial « La place de la *par-résia* chez Michel Foucault : deux rencontres avec Philippe Sabot », *ZINBUN* 51 三月

都 留 俊太郎

台湾語——王育徳における大衆と「チャンボン語」 駒込武編『生活綴方で編む「戦後史」——〈冷戦〉と〈越境〉の一九五〇年代』 岩波書店 六月

大沼報告へのコメント——台湾社会経済史の成果を手がかりに メトロポリタン史学 二七号 一二月

翻訳 梁秋虹「女性史の三通りの読み方——洪郁如『近代台湾女性史』を手がかりに」 二十世紀研究 二一号 一二月

直 野 章子

「被爆者」カテゴリー創設と原爆被害者調査——広島市原協の活動を中心に 広島医学 七三巻四号 四月
他者の苦しみに想像力を 共同通信配信
（京都新聞、信濃毎日新聞、上毛新聞ほか） 五月二十八日ほか

針路二一 迫る「終末」の危機のなか

神戸新聞 八月一三日
当事者になる——体験の継承者から記憶の担い手へ

生活協同組合研究 五三五号 八月

死者と出会う記憶の場 日本平和学会編『戦争と平和を考える

るNHKドキュメンタリー』 法律文化社 十月

書評 ラン・ツヴァインゲンバーク著『ヒロシマ・グローバルな記憶文化の形成』 図書新聞 十一月一四日号

針路二一 「受忍論」の不条理 神戸新聞 十二月二四日

今を読む 核兵器禁止条約と日本政府

中国新聞 二月一三日

永田 知之

北朝詩文知識普及初探——以文学創作的程式化为中心 劉躍進・徐興無主編『大夏与北魏文化史論叢』 鳳凰出版社 八月

読京都大学人文科学研究所蔵鈔本周易正義跋 中国典籍日本古写本の研究ニューズレター 六 十一月

『文史通義』内篇三詠注 東方学報 九五冊 十二月

書簡文 金文京編『東アジア文化講座 第二卷 漢字を使った文化はどう広がっていったのか 東アジアの漢字漢文化圏』 文学通信 三月

中西 竜也

中国でアラビア語文献を探す Kyoto University ACADEM-

IC GROOVE Vol. 2: BORDER-Humanities and Social Sciences, Kura, 京都大学人社未来形発信ユニット 一月

After Criticism of Ma Dexin against Veneration of Saints: Rethinking Chinese Elaboration of Islam. Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies 14 三月

馬徳新による聖者崇拜批判とその後——イスラームの中国適応再考 東長靖、イディリス・ダニシマズ、藤井千晶編『イスラームの多文化共生の知恵——周縁イスラーム世界のスーフィズムに着目して』

ケナン・リファイー・スーフィズム研究センター 三月

平岡 隆二

蘭学（洋学） 日本思想史事典編集委員会編『日本思想史事典』 丸善出版 四月

今井漆さんと『天官書』 人文 六七号 六月

キリシタンと和時計関連史料 科研費中間成果報告集『近世日本のキリシタンと異文化交流』 一月

福谷 彬

ある先輩の背中——石立善さんへの詠—— 所報人文 六七号 三月

『朱子語類』卷一四——一八詠注（12） 京都府立大学学術報告 人文 七二号 十二月

『文史通義』内篇三詠注 東方学報 九五冊 十二月

『陳亮集・増訂本』抄訳（三）——「廷対」詠注（1）——

福 家 崇 洋

全国労農大衆党結党の検討

大原社会問題研究所雑誌 七四〇号 六月

書評 武藤秀太郎『大正デモクラットの精神史 東アジアにおける「知識人」の誕生』

図書新聞 三四五二号 六月二〇日

社会主義運動史研究会から運動史研究会へ…伊藤晃氏インタビュー（共著）

大原社会問題研究所雑誌 七四一号 七月

小林杜人の転向論に焦点をあてて

大原社会問題研究所雑誌 七四一号 七月

書評 河西英通『「社共合同」の時代 戦後革命運動史再考』

歴史学研究 九九九号 八月

戦後共産党史 レッドページから六全協まで 筒井清忠編

『昭和史講義』【戦後篇】上 筑摩書房 八月

養徳社の風景（一） EURO-NARASIA Q 一七号 一月

『社会民衆新聞』【社会大衆新聞】解題『社会民衆新聞・社会大衆新聞』復刻版 第五卷 三人社 一月

満川亀太郎 国家社会主義 長妻三佐雄・植村和秀・昆野伸

幸・望月詩文編著『ハンドブック近代日本政治思想史 幕末から昭和まで』 ミネルヴァ書房 二月

寿岳文章と河上肇『寿岳文章 人と仕事展』

寿岳文章人と仕事展実行委員会 三月

大正デモクラシーと戦後民主主義 松尾尊允の研究を中心に
出原政雄・望月詩史編『戦後民主主義』の歴史的研究

法律文化社 三月

●特集 山本明コレクション（共編著）

人文学報 一一六号 京都大学人文科学研究所 三月

特集にあたって（共著） 人文学報 一一六号 三月

映画「武器なき斗い」と戦後自主製作・上映運動

人文学報 一一六号 三月

藤 井 律 之

汝陰と汝南——東京国立博物館蔵『淮南子』寫本劄記

中國典籍日本古寫本の研究 Newsletter No. 6 十一月

藤 原 辰 史

書評 アルフレッド・W・クロスビー、西村秀一訳『史上最悪のインフルエンザ 忘れられたパンデミック』

コロナブルーを乗り越える本 四月

泥の歴史学 図書四月号 八五六号 四月

書物復権によせて 書物復権 四月

パンデミックから紡ぐ思考 青土社 四月一日

パンデミックを生きる指針——歴史研究のアプローチ 岩波新書（WEB） 四月二日

道草の雑想14 心配性の育児 クーヨン五月号 二五巻五号 四月

歴史の屑拾い1 群像五月号 七五巻五号 四月

重装備社会の農業

世界思想 四七号 四月

インタビュール パンデミックから紡ぐ思想

現代思想ウェーブ 四月十四日

時論フォーラム 食糧危機への警告 毎日新聞 四月二三日

災厄の長期化に備えよ 次世代に恥じぬ決断を

共同通信配信 四月二六日

「人文知」軽視の政権は失敗する 朝日新聞 四月二六日

ナチズム、ホロコースト 金澤周作監修『論点・西洋史学』

ミネルヴァ書房 四月

道草の雑想15 危機の時代の子育て

クイーン六月号 二五巻六号 五月

歴史の屑拾い2 見えない恐怖について パンデミックの落

としもの(1) 群像六月号 七五巻六号 五月

先行き見えぬコロナ禍 心の整理 歴史書が有効

北海道新聞 五月十四日

時論フォーラム 新型コロナ禍と種苗法改正

毎日新聞 五月二八日

あとには戻れないならば 図書六月号 八五八号 六月

道草の雑想16 ケアとメンテナンストにもつと価値を

クイーン七月号 二五巻七号 六月

歴史の屑拾い3 群像七月号 七五巻七号 六月

高度監視社会のパンとペン アステイオン 九二号 六月

「空想書店」困難な時代集える場 読売新聞 六月十四日

ポスト・コロナの思想―新しいエコロジーに向けて

グローバルネット六月号 六月

(往復書簡) 枝元ほなみ×藤原辰史「食」から見える社会の
今 不安の時代をどう暮らすのか

生活と自治 七月号 六一五号 六月

時論フォーラム 戦争の記憶 毎日新聞 六月二五日

対談 人生案内の流儀 鷺田清一×藤原辰史

せかいしそう 六月二六日

書評 バージニア・リー・バートン『いたづらかんしゃち
ゆうちゅう』

おそれ―病気を怖がる人間の怖さ 子どもの本 四六巻七号 七月

道草の雑想17 苦手なもの 道標夏季号 七月

道草の雑想17 苦手なもの

クイーン八月号 二五巻八号 七月

歴史の屑拾い4 日記と地域史 パンデミックの落としもの

(3) 群像八月号 七五巻八号 七月

羅針盤 出雲介 いつも思考の中心に

山陰中央新報 七月十二日

時論フォーラム 「難民鎖国」

毎日新聞 七月二三日

書評 ジェームズ・C・スコット『反穀物の人類史―国家誕
生のデイルプヒストリー』；福永真弓『サケをつくる人び
と―水産養殖と資源再生』；小山俊樹『五・一五事件―海
軍将校たちの「昭和維新」』

図書新聞 七月二五日

歴史から何を教訓にし、何に対峙すべきか

大阪保険医新聞 七月二五日

ナチスのキッチン・ヒトラーの食糧戦争

立命館言語文化研究 三二巻一号 七月

パンデミックを生きる指針―歴史研究のアプローチ

季刊人権問題夏号 六一号 七月

監獄化する世界の中で—あるいは距離の遠さと近さについて

TURN JOURNAL SUMMER 2020-ISSUE 4 七月

戦争を教えること 子どもの本棚八月号 六二二号 八月

こぼれるということ 図書八月号 八六〇号 八月

もういい加減に 女性のひろば 四九八号 八月

次の世代を納得させる「協同組合の理念」とは何か 特集コ

ロナと私たち② 月刊JA 六六巻八号 八月

道草の雑想18 声に出して読む

クーヨン九月号 二五巻九号 八月

歴史の屑拾い5 戦争体験の現在形 出会いの歴史学(1)

群像九月号 七五巻九号 八月

時論フォーラム「ベーシックインカム」食と医療、保障が

前提 毎日新聞 八月二七日

流速を上げる市井 強権化する政治

毎日新聞 八月二九日

学校給食史の基本構造—貧困・災害・教育

農業と経済九月号 八六巻八号 九月

道草の雑想19 日常の延長としての戦争

クーヨン十月号 二五巻一一号 九月

歴史の屑拾い6 戦争体験の現在形(2) 講義の中の戦争

群像十月号 七五巻一〇号 九月

時論フォーラム グレーバーの死 毎日新聞 九月二四日

羅針盤「もしも」の思考 万一に必要なことは何か

山陰中央新報 九月二十七日

図書十月号 八六二号 十月

もののけのたぐい 地球救出型農業へ 農業 十月

道草の雑想20 腸内レストラン

クーヨン十一月号 二五巻一二号 十月

学問と思想への弾圧に 山陰中央新報他 十月三日

書評 川端康雄『ジョージ・オーウェル「人間らしさ」への

の讃歌』 朝日新聞 十月三日

歴史の屑拾い7 大学生の歴史学(1)

群像十一月号 七五巻一一号 十月

培養肉・言論の消滅・ベーシックインカム 五〇年後のため

に— CDI創立五〇周年記念誌 十月

書評 ヴィトルト・ビレツキ『アウシュヴィッツ潜入記 収

容者番号486』 朝日新聞 十月十七日

新・植物考 第一回 花について

ウェブマガジン生きのびるブックス 十月

時論フォーラム 学術会議任命拒否結束してあらがおう

毎日新聞 十月二二日

保育の意味 季刊保育問題研究 三〇五号 十月

ユーラシア東部諸島中立地帯構想という思考実験

はななみ通信六一号 十月

書評 ショーン・タン『内なる町から来た話』

朝日新聞 十月三一日

◎縁食論 孤食と共食のあいだ ミシマ社 十一月

論説 コロナ禍と差別問題

人権と部落差別 七二巻一一号 十一月

書評 湯澤規子『ウンコはどこから来て、どこへ行くのか』

「黄金」の地理学 ちくま 五九六号 十一月

見かけではない食の変革に向けて えぼ 十二月

道草の雑想21 勉強とは何か クーヨン十二月号 二五卷一三号 十一月

歴史の屑拾い8 大学生の歴史学(2) 群像十二月号 七五卷一二号 十一月

書評 方方『武漢日記 封鎖下六〇日の魂の記録』 朝日新聞 十一月十四日

空白の恐怖と地球の危機 コロナ禍での思考 yon yon 六五卷 十一月

対談 2000回折々のことば 広場やカフェのように 藤原辰史×鷺田清一 朝日新聞 十一月二二日

時論フォーラム 学術会議任命拒否 毎日新聞 十一月二六日

書評 石井正子『甘いバナナの苦い現実』パスコス・バナイ

ー『フィッシュ・アンド・チップスの歴史―英国の食と移民』 朝日新聞 十一月二十八日

さつまいもと帝国日本 史学 八九卷三号 十二月

次の世代、子孫のために 図書十二月号 八六四号 十二月

道草の雑想22 乱世の教育 クーヨン一月号 二六卷一号 十二月

増殖力の行方 どう考える? 種苗法 十二月

感染症の歴史に学ぶ―コロナ時代の学校と社会 人間と教育 十二月

ナチスの農業思想 伊藤邦武ら編『世界哲学史 別巻』

書評 片岡一郎『活動写真弁史 映画に魂を吹き込む人びと』 朝日新聞 十二月十二日

羅針盤 「縁」とは偶然に委ね結ぶもの 山陰中央新報 十二月十三日

書評 二〇二〇年下半年期読書アンケート 図書新聞 十二月十九日

新・植物考 第二回 葉について(1) ウェブマガジン生きのびるブックス 十二月

各自核論 生きたいと思える国に 自己責任主義際立つ日本 北海道新聞 十二月二四日

時論フォーラム 劣化する政治 毎日新聞 十二月二四日

書評 書評委員が選ぶ「今年の3点」 黒川伊織『戦争・革命の東アジアと日本のコミュニスト 1920―1970年』・中

井亜佐子『へわたしたち』の到来 英語圏モダニズムにおける歴史叙述とマニフェスト・デヴィッド・グレーバー

『ブルシット・ジョブ クソどうでもいい仕事の理論』 朝日新聞 十二月二六日

歴史家が語る、パンデミックを生きる指針 感染症を学校で どう教えるか

解説 コロナ禍の学びを育む社会科授業プラン 十二月

解説 国連用語に依存しない環境史叙述を求めて 西洋史学 十二月

●農の原理の史的研究―「農学栄えて農業亡ぶ」再考

歴史の屑拾い9 一次史料の呪縛(1)

創元社 一月

群像一月号 七六巻一号 一月

世界の換気に向けて―空気が凶器である時代に

i女のしんぶん 新年号 一月

対談 藤原辰史×山内志朗 人間は生きた土である―分解と

混合の哲学 現代思想 四九巻一号 一月

対談 食べることは孤独じゃない 藤原辰史×松重豊

朝日新聞 一月一日

過去のパンデミックからの考察―スペイン風邪を考える

医学のあゆみ 二七六巻一号 一月

道草の雑想23 チンブンカンブン大学

クーヨン二月号 二六巻二号 一月

書評 ローベルト・ゲルヴァルト『史上最大の革命 191

8年11月、ヴァイマル民主政の幕開け』

朝日新聞 一月十六日

時論フォーラム 養鶏と政治 変革の遅れ招く汚職

毎日新聞 一月二十八日

●言葉をもみほぐす(共著)

食権力論の射程 服部伸編『生政治から見た「幸せ」になる

ためのせめぎ合いとその技法 身体と環境をめぐる世界

史』 人文書院 二月

歴史の屑拾い10 一次資料の呪縛(2)

群像二月号 七六巻二号 二月

団体交渉について

吉田寮二〇二一 二月

書評 竹岡敬温『ファシズムへの偏流 ジャック・ドリオと

フランス人民党(上・下)』 朝日新聞 二月六日

対談 農に第三の道あり 藤原辰史×斎藤幸平

中央公論二月号 二月

新・植物考 第三回 葉について(2)

縁食論後縁録 ウェブマガジン生きのびるブックス 二月

羅針盤 自治の時代 中央集権から決別しよう みんなのミシマガジン 二月

時論フォーラム 「ねじ伏せられる被災者」権力者の手法

克服を 毎日新聞 二月二五日

書評 菊池秀明『太平天国 皇帝なき中国の挫折』

朝日新聞 二月二七日

対談 「あいだ」のつくり方、ひらき方 光嶋裕介×藤原辰

史 史 みんなのミシマガジン 二月

歴史の屑拾い11 一次史料の呪縛(3)

群像三月号 七六巻三号 三月

書評 ナチスの聖典は絶版にすべきか 藤原辰史さんが選ぶ

「絶版本」R・W・ダレエ 黒田禮二 訳『血と土』絶版

本 柏書房編集部 三月

土の思想をめぐる考察―脱農本主義的なエコロジーのために

生環境構築史二号 三月

書評 呉叡人『台湾、あるいは孤立無援の島の思想 民主主

義とナショナリズムのディレンマを越えて

朝日新聞 三月二十日

時論フォーラム 「非人道的な難民政策」入管、抜本改正を

毎日新聞 三月二五日

対談 湯浅誠×藤原辰史 緩やかな縁、豊かな無縁

読書人 三月二六日

●環世界の人文文学―生と創造の探究（共編著）

人文書院 三月

船 山 徹

The Genesis of *Svasamviti-samyitti Reconsidered. Mark
SIDERITS et al. (eds.), *Buddhist Philosophy of Con-
sciousness: Tradition and Dialogue*, Leinden/Boston:
Brill. 十一月

『出要律儀』佚文に見る梁代仏教の音写語

東方学報 九五冊 十二月

沈約撰「南齊禅林寺尼浄秀行状」訳注（共著）

東方学報 九五冊 十二月

仏典の伝播と日本の経蔵 上島享・吉田一彦編『日本宗教史

2世界のなかの日本宗教』 吉川弘文館 二月

古 松 志

一〇～一二世紀ユーラシア東方における「多国体制」再考

唐代史研究 二二三号 八月

一一世紀ユーラシア東方における多国体制と「帝国」

西洋史研究 四九号 十一月

コズロフ蒐集ハラホト出土モンゴル語印刷文献断簡G 一一〇

rについて―『大元通制』ウイグル字モンゴル語訳の発見
―（共著） 日本モンゴル学会紀要 五一号 三月

宮 紀 子

天地を擲ち算袋の裡に封ずべし―中国数学史における epoch

― 中国史学 第三〇卷 十月

帝国の遺文、異聞の帝国

ユリイカ 二〇二〇―二二「特集：偽書の世界」 十二月

モンゴル帝国史研究に進む人のために 志茂碩敏・志茂智子

『モンゴル帝国史研究 完篇―中央ユーラシア遊牧諸政権

の国家構造』 東京大学出版会 三月

宮 宅 潔

Crime and the Place of Execution in Early China. TOMI-
YA Itaru and Reinhard EMMERICH (eds.), *Crime and
Society in East Asia*, Universitt Mnster. 四月

岳麓書院所蔵簡《秦律令（壹）》訳注稿（三）（共著）

東方学報 九五冊 十二月

村 上 衛

大分岐 金澤周作監修『論点・西洋史学』

ミネルヴァ書房 四月

書評 豊岡康史・大橋厚子編『銀の流通と中国・東南アジ

ア』 社会経済史学 八六卷一号 五月

●グローバル経済の歴史（河崎信樹・山本千映と共著）

有斐閣 八月

現代中国と英語圏との対話—経済史 飯島渉編『大国化する中国の歴史と向き合う』 研文出版 九月

書評 古田和子編著『都市から学ぶアジア経済史』 歴史と経済 二四九号 十月

書評 秋田茂編『グローバル化の世界史』 経営史学 五五巻三号 十二月

● 転換期中国における社会経済制度 (編著)

寄付する人と使う貨幣—清代後期の貨幣使用と格差社会 村上衛編『転換期中国における社会経済制度』 京都大学人文科学研究所 一月

海の近代中国と感染症 秋道智彌・角南篤『海とヒトの関係学四 疫病と海』 西日本出版社 三月

守岡 知彦

漢字の知識表現—字書と用例とコンピュータと— 第十五回 TOKYO 漢籍 SEMINAR 用原稿 (未公開) 五月

人情情報—データサイエンスに基づく人文学 富山大学人文学部「データサイエンスに関する講演会」配布資料

漢字構造変換の試み じんもんこん二〇二〇論文集 十二月

Viewpoints on the Structural Description of Chinese Characters. Yannis Haralambous (Ed.) *Grapholinguistics in the 21st Century/Grafemantik: Proceedings of the*

2020 Conference, Part II

二月

CHISE の Web API 化の試み、ついでに、RDF 化四度目の正直、東洋学へのコンピュータ利用 第33回研究セミナー 三月

漢字字体規範史データセットにおける版管理 シンポジウム「字体資料共有の現在と未来」配布資料 三月

森本 淳生

L'absence de La Jeune Parque dans les *Recherches sur l'usage littéraire du langage* de Merleau-Ponty *Revue de langue et littérature françaises* 54 Université de Tokyo 十二月

フーコー「文学論」の射程—一九七〇年のサド／フロアール講演をめぐって 小泉義之・立木康介編『フーコー研究』 岩波書店 三月

イマージュ・アニマル—哲学的動物論と環世界 石井美保・岩城卓二・田中祐理子・藤原辰史編『環世界の人文学—生と創造の探究』 人文書院 三月

矢木 毅

僻派の残影—朝鮮後期政治史の一断面 東方学報 九五冊 十二月

安岡 孝一

人名用漢字の新字旧字：「恋」と「戀」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月二日
 広告の中のタイプライター：Rapid Typewriter
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月九日
 人名用漢字の新字旧字：「帯」と「帶」
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月一六日
 広告の中のタイプライター：Olivetti Praxis 48
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月二三日
 人名用漢字の新字旧字：「洪」と「澆」と「澀」
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 五月一四日
 広告の中のタイプライター：Keystone Typewriter
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 五月二一日
 人名用漢字の新字旧字：「社」と「社」
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 五月二八日
 広告の中のタイプライター：Ford Aluminum Typewriter
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 六月四日
 人名用漢字の新字旧字：「莓」と「莓」
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 六月一一日
 広告の中のタイプライター：Williams No. 1 (Curved Keyboard Model)
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 六月一八日
 人名用漢字の新字旧字：「緑」と「綠」
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 六月二五日
 広告の中のタイプライター：Jewett Typewriter No. 3
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月二日
 人名用漢字の新字旧字：「机」と「几」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月九日
 広告の中のタイプライター：Blickensderfer No. 7
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月一六日
 人名用漢字の新字旧字：「読」と「讀」
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月三〇日
 広告の中のタイプライター：Corona 4
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 八月六日
 人名用漢字の新字旧字：「画」と「畫」と「畫」
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 八月二〇日
 広告の中のタイプライター：Remington 25 Electric
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 八月二七日
 人名用漢字の新字旧字：「徳」と「德」
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 九月三日
 形態素解析部の付け替えによる近代日本語（旧字旧仮名）の係り受け解析 情報処理学会研究報告「人文科学とコンピュータ」
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 九月五日
 広告の中のタイプライター：Helios
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 九月一〇日
 人名用漢字の新字旧字：「宐」と「肉」
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 九月一七日
 広告の中のタイプライター：Sterling Typewriter
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 九月二四日
 人名用漢字の新字旧字：「塩」と「鹽」と「鹽」
 三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月一日
 広告の中のタイプライター：Kanzler Nr. 3

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月八日
人名用漢字の新字旧字：「閱」と「閱」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月一日
広告の中のタイプライター：Molle Typewriter No.3

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月二日
人名用漢字の新字旧字：「価」と「價」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月二九日
広告の中のタイプライター：Densmore Typewriter No.5

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月五日
人名用漢字の新字旧字：「醬」と「醬」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月二日
広告の中のタイプライター：Kanzler Nr.4

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月一九日
漢文の依存文法解析にもとづく自動訓読システム 日本漢字

学会第三回研究大会予稿集 十一月二〇日
人名用漢字の新字旧字：「祿」と「祿」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月二六日
広告の中のタイプライター：Lasar Typewriter

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十二月三日
人名用漢字の新字旧字：「渾」は常用平易か

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十二月一〇日・一七日
Universal Dependencies にもとづく多言語係り受け可視化

シール deplacy 人文科学とコンピュータシンボジウム
「じんもんじん二〇二〇」論文集 十二月

広告の中のタイプライター：olivetti valentine

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十二月二四日
Transformers の BERT は共通テスト『国語』を係り受け解
析する夢を見るか 東洋学へのコンピュータ利用 第三三
回研究セミナー 三月五日

人

文

第六八号 二〇二一年六月三十日

京都大学人文科学研究所発行

共同印刷工業

非売品